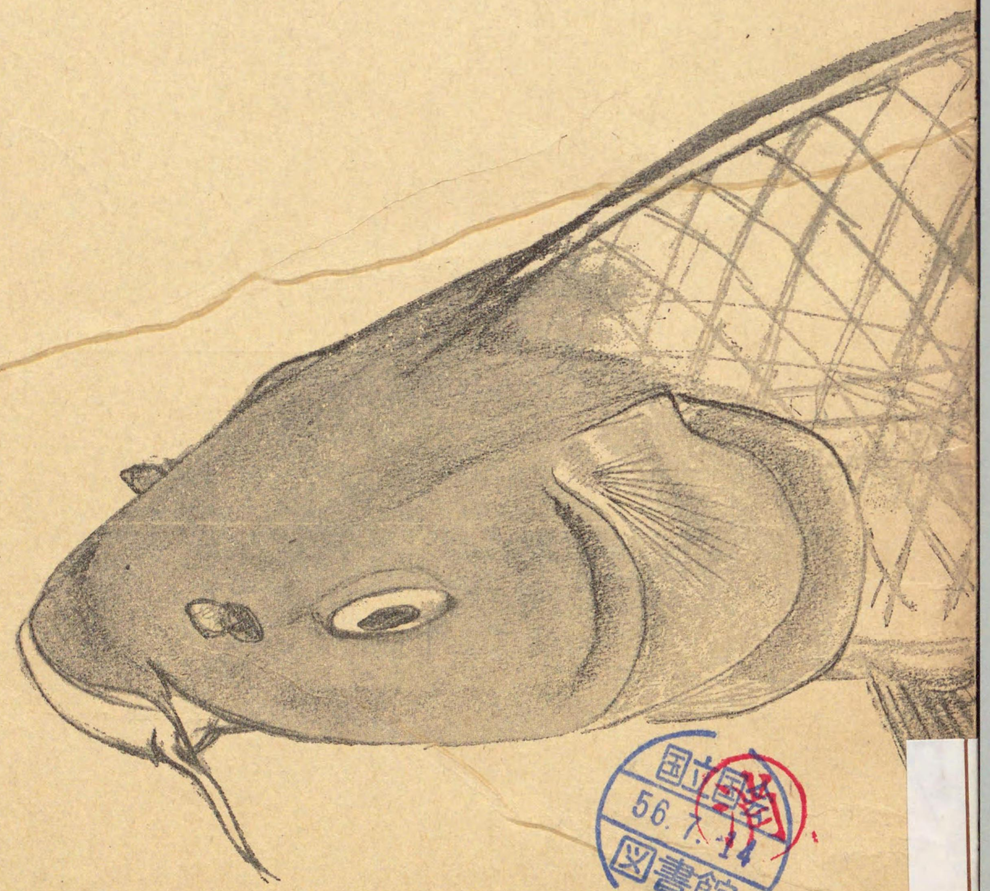
金井紫雲編

科資所藝

K231
35
81W57865



蛙・蝸牛・蛞蝓

国立国会
56.7.14
図書館

第四期　第八冊

藝術資料

第四期 魚介蟲類篇

第八册『蛙・蝸牛・蛞蝓』

目次

口繪

椿　山筆「蒲塘秋艷」（原色版）
顔　輝　筆「蝦蟇仙人圖」（玻璃版）
傳　鳥羽覺猷筆　高山寺藏「鳥獸戲畫卷」上
同
渡邊崋山筆「蛙二圖」
長澤芦雪筆「蝦蟇圖」
酒井抱一筆　繪手鑑の中の「蛙圖」
竹内栖鳳筆「蛙と蜻蛉」（十五回帝展出品）
土田麥僊筆「蛙、蝌斗」素描
安田靫彦筆「一茶」七絃會出品
酒井三良筆「淵」十五回院展出品
田中咄哉州筆　蛙素描
横山大觀筆「杏」の蝸牛
織田觀潮筆　蝸牛素描
西澤笛畝筆　蟲類百姿の蝸牛
山海名產圖會の「山蛤」（扉）

本文

蛙の概說……二
蛙の種類……三
萬葉集の河蝦……六
蛙文獻抄……一一
蛙と詞藻……一三
四季物語、類聚名物考、今昔物語、無名祕抄
袋草紙、沙石集、蜻蛉日記、後撰和歌集、
清輔朝臣集、徒然草、明月記、古今集
蛙七趣、芝居の蛙……一八
蛙、蝦蟇の奇譚……二〇
笈埃隨筆の川鹿……一五
近衞御門の蝦蟇（今昔物語）……二一
嬉遊笑覽の蛙、蛙と故事……二三
蝦蟇と神仙、蛙の繪……二五
蛙の和歌、漢詩、俳句……二六
蝸牛の概說、種類……二四
蝸牛の詩歌と故事……二六
狂言「蝸牛」　蝸牛詞藻……二七
歌謠と蝸牛……二〇
蝸牛の俳句……三一
蛞蝓（なめくぢ）……三二

藝術資料　第四期　魚介蟲類篇

第八册『蛙・蝸牛・蛞蝓』

目次

口繪

椿　山筆　「蒲塘秋艷」（原色版）
顔　輝　筆　「蝦蟇仙人圖」（玻璃版）
傳　鳥羽覺猷筆　高山寺藏「鳥獸戲畫卷」上
同　渡邊崋山筆　「蛙二圖」
長澤芦雪筆　「蝦蟇圖」
酒井抱一筆　繪手鑑の中の「蛙圖」
竹内栖鳳筆　「蛙と蜻蛉」（十五回帝展出品）
土田麥僊筆　「蛙、蝌斗」素描
安田靫彦筆　「一茶」七絃會出品
酒井三良筆　「淵」十五回院展出品
田中咄哉州筆　蛙素描
横山大觀筆　「杏」の蝸牛
織田觀潮筆　蝸牛素描
西澤笛畝筆　蟲類百姿の蝸牛
山海名產圖會の「山蛤」（扉）

本文

蛙の概説……二
蛙の種類……三
萬葉集の河蝦……六
蛙文獻抄……一二
蛙と詞藻……一三
四季物語、類聚名物考、今昔物語、無名祕抄
袋草紙、沙石集、蜻蛉日記、後撰和歌集、
清輔朝臣集、徒然草、明月記、古今集
蛙七趣、芝居の蛙……一八
蛙、蝦蟇の奇譚……二〇
笈埃隨筆の川鹿……一五
近衞御門の蝦蟇（今昔物語）……二一
嬉遊笑覽の蛙、蛙と故事……二三
蝦蟇と神仙、蛙の繪……二五
蛙の和歌、漢詩、俳句……二六

蝸牛の概説、種類……二四
蝸牛の詩歌と故事……二六
狂言「蝸牛」　蝸牛詞藻……二七
歌謠と蝸牛……三〇
蝸牛の俳句……三一

蛞蝓（なめくぢ）……三二

蒲塘秋艷

椿　山筆

蒲塘秋鮑

蝦蟇仙人圖

顏輝筆

蝦蟇仙人圖

顏輝筆

蘇蘇山人圖

蘇聯華

鳥獸戲畫卷

傳鳥羽僧正覺猷筆

筆獻覺正倚羽鳥傳

卷 畫 戲 獸 鳥

蛙二圖

渡邊崋山筆

蝦蟇圖

長澤芦雪筆

繪手鑑の中の「蛙圖」

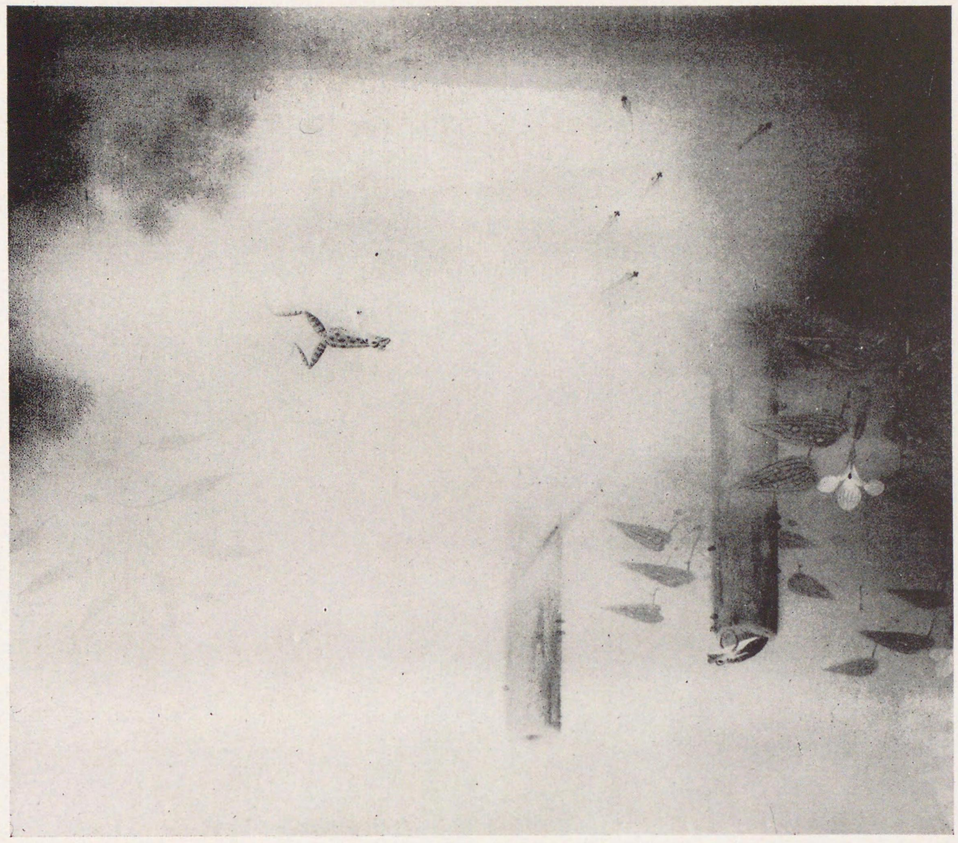
酒井抱一筆

筆 鳳 栖 内 竹　　蛤 蜻 と 蛙

斗蝌蚪

雪僊麥田土

筆彥軏田安

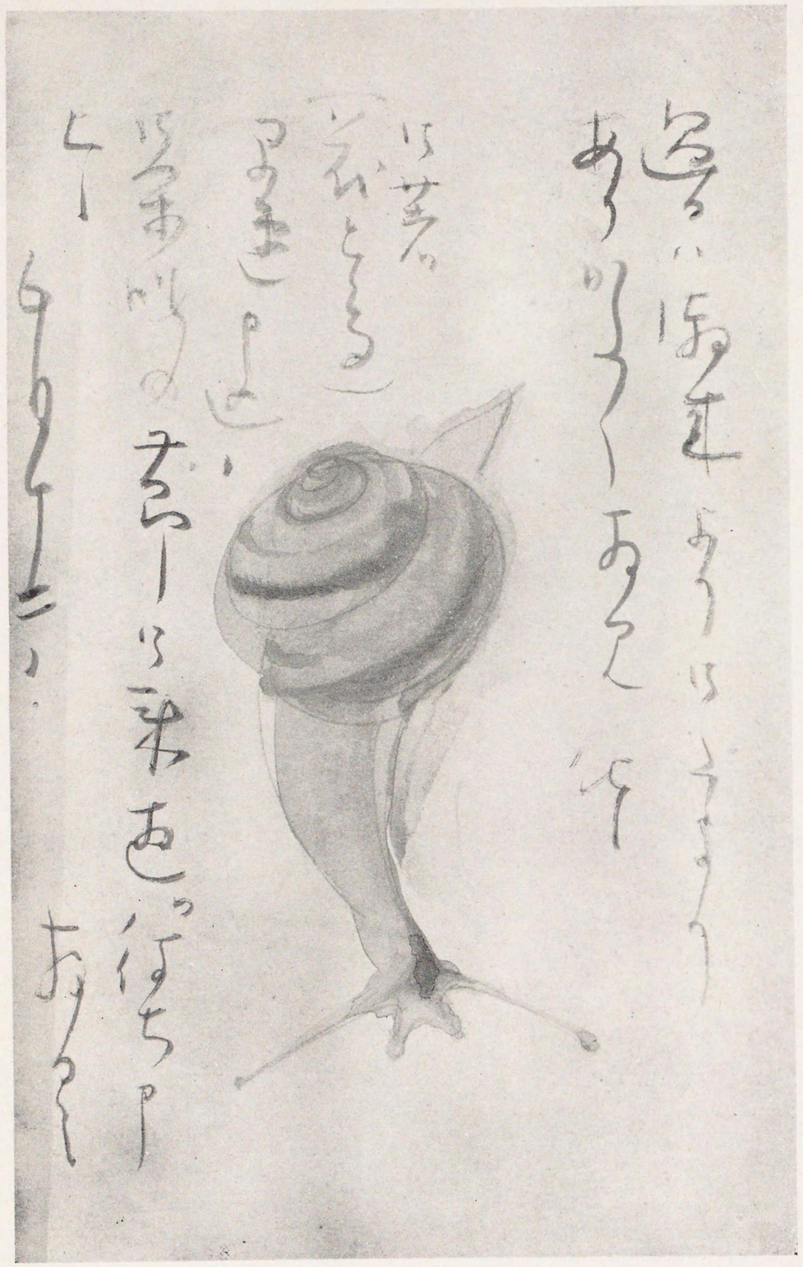


蛙　素描

蛙聲　林業　田中

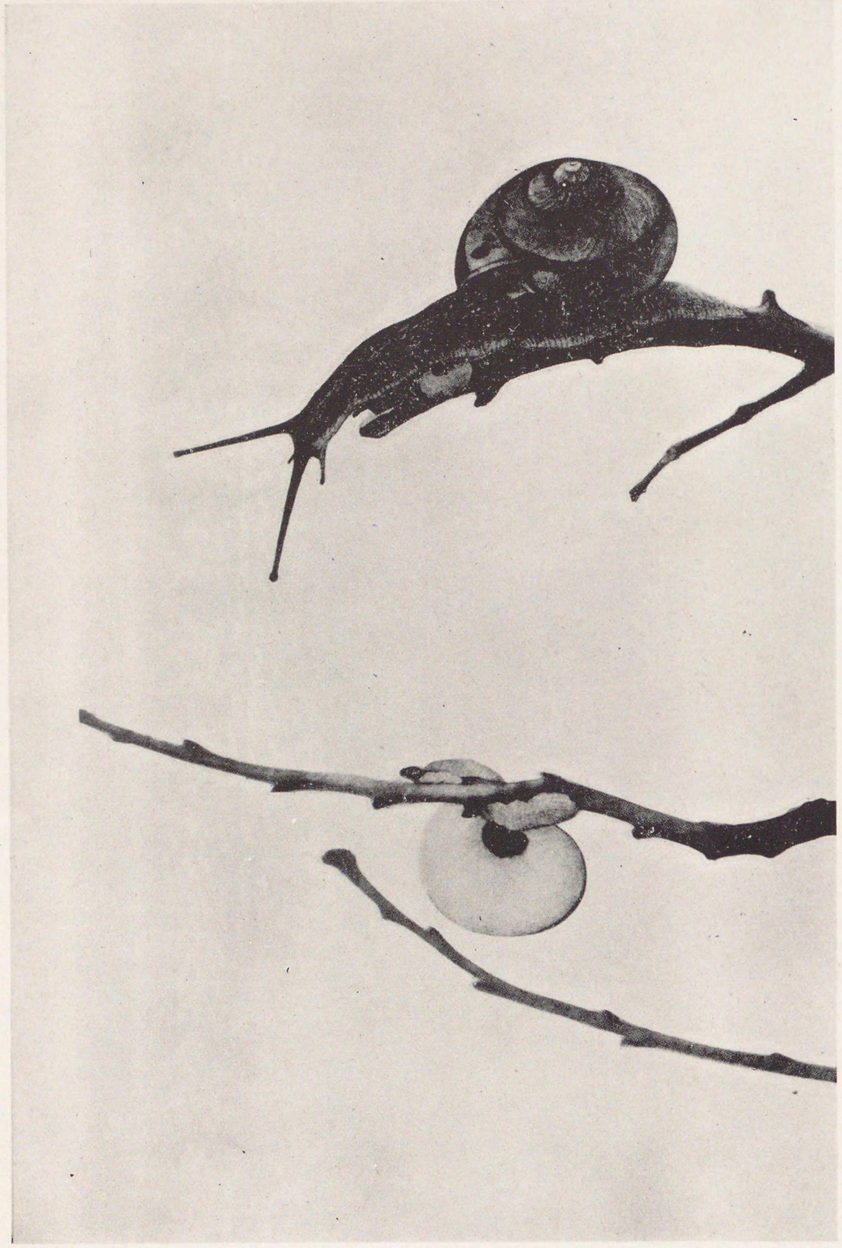
筆觀大山横

牛蝸の「杏」



蝸牛素描

織田觀潮筆



蟲類百姿中の蝸牛

西澤笛畝筆

金井紫雲編

藝術資料

第四期　魚介蟲類篇　第八冊

蛤蜊・牛蝸・蛙蝦

山海名產圖會

合名會社芸艸堂刊行

K231
35

蛙の概説

『花になくうぐひす、水にすむかはづの聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける』とは、『古今集』の序に記す處、かうして蛙は、古くから藝術には交渉の多い動物となつてゐる。

その『かはづ』といふのは、蛙の一種である『かじか』のことであり、萬葉集六の『山彦のこたへし極み谷潜の――』とある、又『延喜式』載するところの谷蟆は、これも蛙の一種である蠻蜍のことであると學者は說いてゐる、小田に鳴く蛙、谷川に歌ふ河鹿の夏の景物として逸することの出來ぬのは言ふまでもない、益蟲として人生に深い交涉をもつてゐることも興味がある。

扨て蛙は脊椎動物、兩棲類で、近頃の學說では無尾類と稱せられてゐるが、沙漠を超えて移り棲むといふことも出來ず、自からその棲息地が局限されてゐるので、矢張兩棲類といふ方が一般には通つてゐる、寒地や高地には少く、成蟲には尾が無く、體は存外廣く、四肢はよく發達して居り、胴の脊椎骨は少くて七個から九個まで、尾椎骨は唯一箇の尾杆になつてしまつてゐる、肋骨は無いのが普通で、もしあれば横突起に合してゐる、耳には普通皷膜があるが、外耳は全く無い、雄は大抵喉に叫嚢を有し特殊の音を發する、皆變態を行ひ、中途にオタマジヤクシといはれる所の飯匙に似た時代を經過する。

現世にゐるものは大約五〇〇種を數へ、これを三亞目に分ける、第一は無舌類で日本産にはこれは無い、舌は退化して全く無い、南米の**コモリガヘル**、アフリカの**ツメガヘル**などその例である、第二は擔弓類で、舌は發達し左右の烏喙骨は懸搖してゐる、此の例には**アマガヘル**、**ヒキガヘル**、**スズメガヘル**、外國産では**クラゲガヘル**、**エビラガヘル**がある、第三は强胸類で、舌などは擔弓類同樣であるから往々二類を合して有舌類と稱して無舌類に對向させる、しかし擔弓類と異り烏喙骨は中線に於て合してゐるので區別するのが普通である例としては、**トノサマガヘル**、**アカガヘル**、**アヲガヘル**、**カジカガヘル**、外國産では**ヲウシガヘル**などがある。

苗代に躍込んで稻苗を害したり、**ヒキガヘル**が**ブホトリン**といふ毒液を分泌することなどはあるが、大體昆蟲類及び動く小蟲類を多く捕食するので、農林業に對しては、害蟲驅除の功を立てゝゐる、聲や姿やとぼけたやうな間のぬけたやうな行動のために愛玩用に飼はれるものもある、皮革は工藝品として用ひられ、近來また肉が藥用以外食用としても用ひられる。

――日本家庭大百科字彙――

本册には、蛙の各種類につきそれ〴〵の資料を收載する目的であつたが、斯くてはそれ〴〵の資料に相當の紙數を要し、且つは往々重複するところがあり、更に今一つ困難なことは、文字に於ける問題が相應にあつて、現在あまり用をなさぬ古い文字を多く羅列しなければならぬ煩があるので、なるべく一般向きの資料を收めることゝした。

81W57865

寺島文庫
56.11.11
国際基督教大学図書館

蛙の種類

蛙の種類は極めて多いがこゝには藝術に交涉の深い品種だけにとゞめて置く

すゞがへる　鈴蛙

體は小にして(體長五〇粍に及ぶ)頭部の長幅相等しく吻端僅に尖る、外鼻孔は眼より吻端に近く、皷膜は皮膚上に現はれず、前肢は體全長の二分の一より長く、第一指最短、第三指最長なり、後肢は長く體の前方に延す時は脛跗關節は前肢の附根に達し第一趾最短、第四趾最長なり、體背面の地色は青色淡褐色又は兩色相混在し大小の皮膚瘤起數多存在す尙ほ頭部及前後兩肢に黑色帶狀斑紋あり、腹面の地色は赤紅色なるが黃赤色にして黑色の不規則なる雲型斑紋あり、三月初旬より四月中旬に亙り産卵し、卵は黑褐色にして直徑二・五粍、外方に三層の膠質包層あり、舊北區系種にして朝鮮對馬、濟州島に分布す。

にほんひきかへる　蟾蜍

體は大にして體長(一二〇粍)頭部外緣は略二等邊三角形を呈し吻端僅に尖る、外鼻孔は上眼瞼前緣より吻端に近く存在す、皷膜は著しく小にして楕圓形、其短徑は上眼瞼横幅の約二分の一なり、前肢は後肢全長の二分一より稍長く第五指最長、第二指最短なり蹼は僅に第一第三諸指の基部に發達す、後肢全長は體長の約二倍大にして體の前方に延す時は脛跗關節は耳線の中位に達し、第一趾最短第四趾最長なり、體背面は暗褐色又は黃褐色にして腹面は淡黃色に黑色の大理石狀斑紋あり、二三兩月或は十一月に膠質の長き紐狀卵塊を産卵す、卵は黑色にして直徑二・五粍―三粍本州の中部以南九州四國に分布す。

にほんあまがへる　雨蛙雨蛤樹蛤

體は小にして(體長四〇粍に及ぶ)頭長く頭幅より稍狹く吻端鈍く尖る、外鼻孔は眼より吻端に近く皷膜は圓形にして其直徑は眼徑の二分一なり、前肢は後肢の約二分一長にして第三指最長、各指先端には皷膜の直徑に等しき大きさの附着盤を有す、後肢は體長より稍短く體の前方に延す時は脛跗關節は眼の後緣に達す、第三趾最長附着盤は前指の夫れに大さ略相等し、體背面は青色又は淡暗灰色にして黑色の斑紋散在することあり、腹面は淡黃色又は白色にして小瘤起密在す、四月初旬冬眠より醒め五六月頃産卵す、卵は暗黃褐色にして外方に二層の膠質包層あり舊北區系種にして北海道本州四國九州佐渡隱岐屋久種子濟州對馬の諸島朝鮮に廣く分布す。

やまあかがへる　山蛤

吻端尖らずして頭長は頭幅より僅に長く外鼻孔は眼と吻端との中間にあり、背側皮膚皺起は顯著にして走行狀態はえぞ赤蛙と略同樣なり前肢長は後肢の三分一にして第三指最長第二指最短、生殖時期には顯著なる肉塊二個第一指外側緣に生ず、後肢は稍長く體の前方に延す時は脛跗關節は吻頂を超ゆ第四趾最長第一趾最短蹼發達す、內蹠瘤起は大なるも外蹠瘤起は小なり、體背面は暗黑褐色又は赤褐色にして黑點狀斑紋散在し腹面は淡灰白色なるか赤橙色にして胸部に黑色雲型斑紋散在

す、二三月に亙り産卵す、卵は暗褐色直徑二粍を算し五百―千五百個相集り球塊をなす北海道朝鮮北部の平地及本州の山地に分布す、昔時山蛤として藥用に供せり。

にほんあかがへる　赤蛙

吻部は長く先端尖る外鼻孔は眼の前端より吻頂に近く、皷膜は圓形にして直徑は眼徑の約三分の二なり、胴部は長く背側皮膚皺起は顯著にして眼の後端より肛門の近くに達す、前肢は短く第一指は第二指より短し、雄は生殖期に顯著なる肉瘤を第一指外緣に生ず、後肢は長く體の前方に向ひ延す時は脛附關節は吻頂の前方に達す、全趾中第四趾最長、蹼良く發達し外蹠瘤起なし、外背面は赤褐色暗褐色等にして腹面は淡黃色なれども冬眠後は鮮赤色の斑紋著し、二月初旬冬眠を終へて出現し暗褐色の小なる卵を産む、卵塊は御供狀を呈し一卵塊内に卵數三百―二千五百粒、本州四國九州に分布す、藥用又は食用に供す。

とのさまかへる　金線蛙

體は大にして長さ八五粍に及び頭長は頭幅より稍長く吻端は鈍く尖る、外鼻孔は吻端より僅か眼に近く皷膜は顯著にして圓形なり、背側は膚皺起は數多ありて長短樣々なり、就中顯著なるは眼の後端より皷膜の背緣を過ぎ胴部背側緣を體の後端に向ひ走るものなり、前肢は稍短く第三指最長、第二指最短にして蹼僅に發達す、後肢は長く前方に延す時は脛附關節は眼の中央に達す、蹼は良く發達し稍厚し、體背色は種々雜多にして白色青色褐色の地色に青黑褐色の斑紋樣々に存在す、腹面は白色にして點狀斑紋少し、五月より七月下旬に亙り産卵し卵は暗黃褐色にして小なり、（直徑一・五粍）外方二層の膠質包層あり、水田に多く棲み農作物の害蟲を捕食するを以て有益なり朝鮮本州四國九州對馬濟州島に分布す。

あをがへる　青蛙

體背面は一樣に青色、腹面は白色にして胴部側面及大腿には暗褐色の大理石狀斑紋あり雌は雄より大なり、頭長は頭幅に等しく吻端は丸味あり、外鼻孔は眼より吻端に近く皷膜は大なる圓形、眼徑の二分一より大なり、前肢は後肢の二分一より稍短く、第三指最長第一指最短、附着盤は大にして皷膜の直徑に等しく蹼發達す、後肢は稍長く體の前方に延す時は脛附關節は眼の前方に達す、第四趾最長第一趾最短、蹼よく發達す、內蹠瘤起は大、外蹠瘤起なし、三月中旬―四月下旬に亙り水田の土中又は水邊の草中に白色の泡狀卵塊を産す卵は淡黃色にして大なり、東洋區系種に屬し沖繩諸島奄美大島臺灣に産す。

かじかかへる　河鹿　金襖子

雌雄著しく體長を異にし（雌七五粍、雄四五粍）背面は暗灰色又は白色にして側面は稍淡黃色を帶ぶ、腹面は淡灰色又は白色にして斑紋なし、前後兩肢には黑色帶狀斑紋あり、頭部は背腹に扁平にして、吻端鈍く尖り、外鼻孔は眼より吻端に僅かに近く、皷膜は大なり前肢全長は後肢の略二分一、第三指最長、第一指最短、各指先端には大なる附着盤あり蹼僅に發達す、後肢は長く前方に延す時は脛附關節は眼の前端に達す、第四趾最長第一趾最短、內蹠瘤起は小、外蹠瘤起なし蹼良く發達す七八月に亙り湖溪流の邊に産卵す日本固有の種にて清聲を以て昔より愛育さる。

――日本動物圖鑑――

萬葉集の河蝦

萬葉集に河蝦鳴、また河津妻呼などよめる河蝦は後の世に蛙鳴云々とよめるものとは、おなじからず（中略）河蝦と河鹿とのけぢめ、さだかならざるがうへに後世加自加とよぶもの魚と蟲と二種ありて、ともに古名にあらず（中略）又二種なることをしらぬ人、一種によりて論ずるあり（中略）今の世には、かはづといへば春の田沼などに、うたてかしかましきまで鳴ものとのみおぼえて秋のころ鳴ものとは思はざる人おほし、そは萬葉の歌より後千百餘年、河蝦を秋の歌によむこと、たえてなかりしかば、さることにはあれど、いにしへに河津とよみしは山川の清きながれにすみて、夏の末より秋かけて、さかりに聲めでたく鳴ものをいひて、春の田溝すべて堪水に鳴ものをば蛙といひて、かはづとはいはざりけむ、萬葉の歌にて見れば、河蝦は山川にすみて秋かけてなくものといひしなり、古今集の序に花に鳴うぐひす、水に住かはづの聲をきけば云々いへりしは、春と秋とをむかへてかける文なれば、河蝦は秋のものなることとしるし。（中略）萬葉集十、秋の雜の歌の中に詠蝦歌五首皆山川にのみよみて、田沼などによめるはひとつもなし、このほかもみなしかり。

三吉野のいはもとさらず鳴くかはづうべも鳴きけり川をさやけみ

神なびの山下どよみゆく水に川津鳴くなり秋といはむとや

草まくら旅にもおもふわがきけば夕かたまけて鳴く川津かも

瀨をはやみ落ちたぎちたる白浪に川津なくなりあさよひ毎に

上つ瀨に川津妻呼ぶ夕されば衣手さむみつまかむとか

古今の序にいへるも、このものならでは鶯の聲に對しがたし、（中略）河鹿といふ魚は聲うるはしく鳴ものなりともいひて、正しく美を知らざるの說どもなり、伊勢の久老（荒木田）神主の說に（中略）或時京師人と宮川の邊に魚つりあそべるに、彼鳴聲をきゝて、いとうるはしき蝦なりといへり、（中略）さては河鹿といふは魚にはあらで蝦なるよしをしり、且田面に鳴蛙とは別なることを知れりとかかれたり、（中略）又岡野磐根云、いにし年、常陸國麻生の殿の難波より河鹿おほくめされて器の中に飼置給ふを見たりしも、ちひさき蝦にてありしとかたられたり、（中略）上田秋成が俗に山かはづと呼で音はささやかなる鈴をふりたるごとく、たれも聞過がたくする物也といへるも同じものなり、（中略）『堀川後百首』時しもあれやみな淵やまを朝ゆけばこのもかのもにかはづ鳴くなり

と讀めるも此の類なり。（下略）

――河蝦考――

◇

小侍從が子に法橋實賢と云ふもの有けり、いかなりける事にか世の人是をひきがへるといふ名をつけたりける法眼をのぞみ申て法の橋のしたに年ふるひきがへる今ひとあがりとびあがらばや

と申したりければやがてなされにけり。

――今物語――

蛙文献抄

東雅

蝦蟇、カヘル、倭名鈔に唐韻を引て、蛙カヘル、蝦蟇也、蝌斗蝦蟇子也、また陶隱居本草註を引て、蝦蟇大而青背、謂之土鴨、はアヲカヘル、黑色謂之蛤子、ツチカヘル、蛙黽アマカヘル、形小如蝦蟇而青色者也、また兼名苑註を引て、蟾蜍ヒキ、似蝦蟇而大、陸居者也と註せり、カヘルといひヒキといふ並不詳

今も俗に變成をカヘルといふ事あり、鳥の子のカヘルなどいふ是也、ふるくも魚の子のカヘルになどいひしことばありけり、蝦蟇の子の初生せし綬帶の如くなる、變じて科斗となり、科斗また變じて蝦蟇となりぬればカヘルコとはいふ也、或說にカヘルとは歸也、これを取棄つるによく歸るもの也などいふが如きは然るべしとも聞えず、とりすつるによく歸るもの蛇にしくはなし、されば ふるくもいひ傳へし事に蛇をすつるには天の逆手といひて、うしろ手にすつれば歸らず、などいひたれど、此物カヘルの名ありしにもあらず、アヲガヘルとは綠色をいふ也、ツチガヘルとは黑色をいふ也、アマガヘルとは今も俗に其鳴ぬるをば、雨の候とする事也、ヒキの義不詳、古語に靈をいひてヒといふ、蟾蜍は物性靈あるものなどいへば、此名ありしもまたしるべからず。

——新井白石——

和漢三才圖會

蟾蜍ひきかへる、本綱蟾蜍（辛涼微毒）其皮汁甚有毒、在人家下濕處、形大背上多疣磊銳頭皤腹促眉濁聲不解鳴、行極遲緩不能跳躍、吐生擲糞自其口出也、或取之反縛看密室中閉之明旦視自解者。

抱朴子云、蟾蜍千歲頭上有角腹下丹書名曰肉芝、能食山精人得食之可仙術家、取用以起霧祈雨辟兵自解縛、今有技者聚蟾爲戲能聽指使物、性有靈於此可推。

蟾有三足者而龜鼈皆有三足則蟾之三足非怪也蓋蟾蜍土之精也、上應月魄而性靈異、穴土食蟲又伏山精制蜈蚣、故能入陽明經退虛熱行濕氣殺蟲蠱而爲疳病癰疽諸瘡要藥五月五日取東行者陰乾用。

按蟾蜍實靈物也、予試取之在地、覆桶於上厭用磐石、明旦開視唯空桶耳、又蟾蜍入海、成眼張多見半變。

蝦蟇　かへる、本綱蝦蟇在陂澤中背有黑點身小能跳接百蟲解作呷呷聲、擧動極急、蝦蟇青鼃畏蛇制蜈蚣、此三物相値彼此皆不能動

周禮蟈氏掌去鼃黽焚秋菊以灰洒之則死。

黑虎身小黑嘴脚小斑。

蚼黃　前脚大後腿小斑色有尾子一條。

黃蛇　遍身黃色腹下有臍帶長長五七分注立處帶下有自然汁出。

螻蟈　卽夜鳴腰細口大皮蒼黑色月令所謂孟夏螻蟈鳴者是也。

按蝦蟇種類甚多、或時有蝦蟇合戰以爲不祥（中略）河州錦部郡天野近處有田、名西行田限畔蛙不鳴。

蛙　あまがへる、本綱蛙似蝦蟇背青綠色、尖嘴細腹後脚長故善躍、性好坐故曰坐魚、俗謂之青蛙、其聲自呼大其聲則曰蛙、小其聲曰蛤、古昔常食之如魚肉味甘寒如雞、蓋以脛鳴者鼃黽之屬、農人占其聲之早晚大小卜豐歉、蛙亦能化爲如鳥。

按蛙如蝦蟇而小、背青綠腹白大者不過寸半、將雨則鳴、故名雨蛙、俗傳云、蛙變爲守宮（やもり）、其變也抱屋壁不敢動不吃雨露三旬許、而變色生尾以行去。

青蝦蟇　俗名土鴨（和名阿乎加閉流）大而青背其鳴甚壯、爾雅所謂在水曰黽者是也。

金線蛙　似青蛙背作黃路。

黑蝦蟇　和名豆知加閉流、黑色者南人名蛤子食之至美以爲佳饌、卽今云水雞是也。

赤蝦蟇　按赤蝦蟇不載本艸、然川澤有之體瘦淺赤色、入五疳藥以爲有効但希有難得耳。

——寺島良安——

本朝食鑑

蛙、訓加閉流、和名阿末加閉流

釋名、源順曰蛙黽形小如蝦蟇而青色者也。蛙古文作鼃、蝦蟇也、和名賀閉流蛤蟲蝌斗也、蝌斗蝦蟇子也、青蝦蟇大而青背、謂之土鴨、黑蝦蟇黑色謂之蛤子、和名豆知賀閉流、必大按此說大抵似是多非詳異同。

集解蛙本作鼃、或壠同烏蝸切、狀似蝦蟇而最小、躍陸升木宿水善鳴、長脚青色、田家卜水旱者、天欲雨時必多鳴、故通俗號雨蛙也、復有大於雨蛙而背青綠色者、有黑褐色者、有背作黃路如金線者、俱在水則鳴、在陸則跳、野人有食之者、其味稍佳、山東人生捕入熱湯中剝皮投芥醋內而食、此稱目摺膾、以賞之、古亦有之、桃花老人、公事根源謂、吉野國樔人煮蛙號毛瀰而食之以爲美味、然則本邦食蛙者久矣。

——平野必大——

物類稱呼

蝦蟇　**かはづ、かへる**、仙臺にて**びつき**と云、西國にて**びき**と云、唐津にて**たんなんびき**と云、土佐にて**ひき**又**おんびき**又**しやくたらう**などゝ云、又一種小さく青色にして木竹の枝に棲ものを關東及畿內にて**あまがへる**（土鴨）と云ふ、九州にて**ほとけびき**、又**あまびき**といふ、唐津にては**あをびき**と云ふ。

重修本草綱目

蝦蟇、カヘル（和名鈔）ツチガヘル（同上）カハキギス（古歌）カハズ（京）カイル（同上、佐渡）オンビキ、シヤクタラウ、クソヒキ、ヒキ（共同上土州）クソガヘル（備前）ビキ（西國）ビツキ（仙台）

蝦蟇に限らず蟾蜍も遠處に移せば、必らず還り來る。故に皆かへると呼ぶ、此類の形小く體瘠せて脚細長なるをカワズと云ふ、皆水中に住み夏夜鳴くこと聒し、品類最多し。

本草和名

鼃　仁諝音胡媼反　一名長股　一名土鴨、大而青背者　蛤子　黑色　鼃子　小形鳴喚已上三種出陶景註　一名蟺、音五綺反　一名螻蟈　已上出兼名苑　和名　加倍留

倭名類聚抄

唐韻云蛙、蝦蟇也兼名苑云、蝦蟇一名螻蟈唐韻云蛞蟲、蝌斗也、蝌斗蝦蟇子也。

蛙と詞藻

蛙といふもの

みくさ清きあぜの夕ぐれは、秋ならねどもあはれはおほかれど、蛙といふものは、えせたるむしにて、人の足になれ來て、ともすれば沓の下にしかれて、うでをひしがれ、身をあやぶむ、律だつびじりなどは、此ごろはあしをとゞむるも、むつかしき身なるべし。

——鴨長明——四季物語——

任吉の忘草

紀叔貞、住吉の浦に行て忘草をたづねければ美女にあへり、來會を契りてわかれけるに後の日行きけるに、かの女來らず、つれ〴〵としてある所に、蛙の濱をあゆみ行くあとを見れば歌なり。

住よしの濱の見るめもわすれねばかりにも人にまたとはれけり。——類聚名物考——

安部晴明と蝦蟇

今昔天文博士安部晴明と云ふ陰陽師有けり（中略）廣澤の寛朝僧正と申しける人の御房に參り物申し承はりける間、若き君達僧共有て晴明に物語などして云く、其識神を仕ひ給ふなるは、忽に人をば殺し給ふらむやと、晴明道の大事を此く現にも問ひ給ふかなと云て、安くは否不レ殺、少しかたに入て様へば必ず殺してむ、蟲などをば塵許の事せむに必ず殺しつべきにて、生く様を不レ知ば罪を得ぬべければ、由なき也など云ふ程に、庭より蝦蟇の五つ六つ許踊りつゝ池の邊様に行けるを君達、而れば彼一つ殺し給へ試むと云ければ、晴明罪造り給ふ君かな、而るにても試み給はむとて、草の葉を摘切て物を讀様にして有ればとて、草の葉を摘切て物を讀様にして蝦蟇の方へ投遣たりければ、其の草の葉、蝦蟇の上に縣ると見ける程に、蝦蟇は眞平に□□て死たりける、僧共是を見て色を失てなむ恐ぢ怖れける。

——今昔物語——

井手のかはづ

あし曳の山吹の花散りにけり井手のかはづは今やなくらむ　藤原　興風

井手の河津と申ことこそやうある事にて侍れ、よの人思ひて侍るは、たゞかへるをみなかはづといふと思へり、それもたがひ侍らねど、かはづと申かへるは、外にはさらに侍らず、たゞこの井手の河にのみ侍る也、色黒きやうにて、いとおほきにもあらず、よのつねのかへるのやうにあらはにおとりあるく事なども、いとも侍らず、常に水にのみすみて、夜ふくるほどに、かれがなきたる聲、いみじく心すみ、ものあはれなる聲にてなん侍る、春夏のころ、かならずおはして聞給へと申しかど其ののちとかくまぎれて、いまだ尋ねずとなん語侍りし。

——無名祕抄——

節信と能因

加久夜長帶刀節信は數奇者なり、始めて能因に逢ひて相互に感緒あり、能因云ふ、今日

見參の引出物に可レ見物侍りとて、懷中より錦の小袋を取出す、其の中に鮑屑一筋あり、示して曰く、是は吾が重寶なり、長柄橋の造られし時の鮑屑なり云々、時に節信、喜悦甚しく又懷中より紙につゝめる物を取出せり、之を開き見るにかれたる蛙なり、これは井堤のかはづに侍る云々、共に感歎して各々これを懷にし退散せり。

——袋草紙——

蛇と龜と蛙

ある池の中に、蛇と龜と蛙と知音にて侍りけり、天下旱して池の水も枯れ、食物もなふして飢ゑてつれ〴〵なりける時、蛇、龜を使者として蛙のもとへ、時程おはしませ、見參せむと云ふに、蛙返事に偽を說て飢渴にせめられぬれば、仁義をわすれて食をのみ思ふ、情も好も、よのつねの時こそあれ、かゝる時なれば、えまゐらじとぞ返事しける。

——沙石集——

かへる葉

山ごもりのみちは、あまかへるといふなをつけられたりければ、かくものしけり、こたざまならではうたもなどけしくておほぢの神のたすけやなかりけむちぎりしことをおもひかへるは——蜻蛉日記——

蛙をききて

おとこの物などいひつかはしける女のもとかの家にまかりてたゝきけれども、きゝつけずやありけん、かどもあけずなりにければ、田のほとりにかへるのなきけるをきゝて

あしひきの山田のそほづ打わびて獨りかへるの音をぞ鳴きぬる　よみ人しらず

——後撰和歌集十二——

かへるの歌

女をうらみていまはあはじとちかごとたてて後、もとよりけに戀しかりければ、あをきすぢあるかみにて、かへるの歌をつくりてかきつけてやりける

ちかひしをおもひかへるの人しれずくちからものをおもふころかな

——清輔朝臣集——

池の蛙に

後德大寺の大臣の寢殿に、鳶ゐさせじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらん何かは苦しかるべき、この殿の御心、さばかりにこそ」とてその後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出られ侍りしに、まことか「烏の群れゐて、池の蛙をとりければ御覽じ悲しませ給ひてなむ」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそおぼえしか、德大寺にもいかなる故か侍りけむ。

——吉田兼好——徒然草——

蛇に呑まれし蛙

寛喜二年六月廿四日東小壺に蛇あり、友村を以て取棄てしむ、腹中に物を飲む、庭中に出づるの間に漸く之を吐き出す、蛙なり、未だ死なず、漸搖して水中に入るゝに無事存知す云々、蛇を川原に棄て蛙已に生く、惡事に非ずや。

——藤原定家——明月記——

花になく鶯水にすむ蛙の聲もきけはいきとし生けるものいづれか歌を詠まざりける

——古今和歌集序——

蛙七趣

かはづ〳〵

かはづ〳〵、住吉の浦のみるめのかりならぬ古今の序にのこされて、其の徳たかき也、かはづ〳〵、廬山のつれ〴〵に詩人も皷吹とほめおきて、その聲のたえなる也、蛙々、木曾路の橋のそれならで、幽谷に虹を吐て、そのあやしき也。

かはづ〳〵、玉川の水にすだき、歌人のことばにめでられて、其名の世々に聞えたる也かはづ〳〵朱雀の小田に啼つれて逢夜それの曉に、嬉し悲しとうたはるゝ其の哀のわりなきなり。

かはづ〳〵、深川の古池に、さびしき音をきかせて、おきなのゆめをさましたる、其功のうへなき也。

——横井也有——

蛙の賛

花に鳴く鶯にともなひては、催馬樂のちからなくして、あめつちをも動すべく、月の桂もをりを得ては不死の藥をまどかにして、おのが齢も久かたなるべし、むしろ香山の石となるとも、ゆめ〳〵鄭門の蛇にならふ事なかれ。

——太田南畝——四方の留袖——

玉川のかはづ

幾度も玉川にゆきて下つ瀬六合のわたりより二子のわたりをさかのぼり（中略）青梅の里にいたり（中略）卯月の始つかた河原におり立て、かなたこなた見めぐるに（中略）河の洲の石あるかたに、ほのかにあはれなる聲ヒウヒウときこゆ、小鳥などの雛にやと思ふばかり人々あれは何の音ぞやと打みるに、さるものも見えず猶ことかたにもなくは、河蝦（かじか）なめりと耳そばだてゝきけば、いとあはれにうるはしき物から浪の音に打けたれて、ほのかなれど小田につねききつる蛙のにるべくもあらず、夏の末より秋にいたりなば、いかばかりうるはしからんと思ひやらる、去年の秋よりおもひ立て、こゝろを盡し、この春も二月ばかりより玉川におり立て下つ瀬より河につきて二十里にちかき間を（中略）さかのぼりたる甲斐ありて秋をもまたで、その聲をきゝぬるこそうれしけれ、人々そのかはづ得てしがなとて（中略）あさりみれども見えず、たゞ水の底にて鳴くやうにきこゆ、後によく〳〵みとめつれば、みな水中より出たる黒き石の上いはをの間などかすかなる處に同じ黒色なる、ちいさき蝦のとりつき居てなけば、ふとは見えざるものなり。

——源眞掛——河蝦考——

謡曲「蛙」

「昔、壹岐の守何某と申し雲の上人、あからさまなるこの宮路に行き留まりし蜑少女の假の苫屋の板庇、久にもあらぬ一夜の契、思ひの妻となりたるなり、「そのまゝきぬ〳〵の袖の名殘も引き留むる、心ならす歸るさに、年月積る心地して、又この浦に立ち歸り、間へば行方も白波の、あはれはかなき契ゆゑ、面影のこる海きはに、立ち出でし夕まくれ、

濱の眞砂を踏み渡る、蛙の道の跡見れば、あり し言の葉あらはるゝ、心を知れば疑も、「涙なからもつくゞ」と、思へばよしな人界も、水の底なるうろくづや、藻に住む蛙うたかたの、あはれ江による心なれば、六趣四生に廻りめぐる、車の輪の如く、鳥の翅や花に鳴く鶯も同じ御法なる言の葉を、囀る蛙こそためしなりけれ。

小田の蛙

また田のうちに蛙のいくらとなく、諸聲になくも、やゝちかき春のわかれをしたひてなくらし、我はまた遙かなる旅路におもむく事なれば、わきて別れを惜しむ蛙の聲も耳にとまりて『孤客最先聞』ともいふべけん。

——白河樂翁——

蛙は歌よみ

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ、朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし、古池に飛んで翁の目ざましたれば此物の事さらにも誇りがたし。

——横井也有——百蟲譜——

故郷の池の蛙

宮は久しく御覽ぜざりつる故郷に、立ち出でさせ給へるにいとゞ荒れまさりて物舊りにける山の氣色も物恐ろしげにて、池水も、水草居て、昔のかげもとまらぬに、蛙の聲ばかり頼もしきしるべにて、事とひまねる人もなきまゝに、おきふしつくゞ」と思し歎くことかぎりなし。

——狹衣物語——大武三位——

芝居の蛙

芝居の蛙で先づ有名なのは『小野道風青柳硯』である、小野道風が雨の柳に飛びつく蛙を見て百折不撓遂に書道の奥義に達したといふ俗説を題名に取り、橘逸勢の叛反に小野頼風と女郎花を絡ませ、これに獨鈷の駄六が活躍する、蛙の件はその第二段で、蛙を見ながら逸勢の陰謀を思ひ僞つて逸勢の味方に入る件で、蛇の目の傘さした立烏帽子狩衣姿の道風の姿が呼物となつた、作者は竹田出雲、吉田冠子、中邑國助、近松半二、三好松洛等で、初演が寶暦五年、道風は市川團十郎であつた。

舞臺に現はれるのでないが、蛙の鳴き聲を聞かせるものでは、『太功記』十段目尼ケ崎の段と、『鏡山故郷錦』の奥庭仕返しがある、『太功記』では、武智光秀の出で、『夕顔棚の彼方より現はれ出でたる武智光秀小田の蛙の鳴く音をばとゞめて敵に覺られじと、抜足さし足』の有名な文字があり、奥庭では、俄かにやんだ蛙の音を訝かしみ、局岩藤がお初と出逢ひになる、何れも蛙の聲が非常に場面を活かすものとなつてゐる。

蝦蟇の妖術といふことは、支那からのものであらうが、これを仕組んだものに『兒雷也豪傑物語』相馬の瀧夜叉姫と大宅光國の『忍夜戀曲者』『音菊天竺德兵衛』がある、『兒雷也』は八代目團十郎に書卸したもので美圖垣笑顔の作を默阿彌が脚色し、三すくみの妖術が見せ場になつてゐる、天竺德兵衛は父宗觀より傳はる蝦蟇の妖術で東山殿を惱ます、瀧夜叉は『肉芝仙より傳はりし蝦蟇の妖術』といふ、だが舞臺に蝦蟇は現はれない。

蛙、蝦蟆の奇譚

歌志久と蛙

常陸のくに麻生の里に手賀幹直といふ人、あざな歌志久となんいひける、あるとき庭のくさむらに蛙のなくこゑおもしろきまゝに、さうじ引あけはし居して打聞つゝ、やり水のそほつるおと、つき山のけはひに風そよぐさまなど打見やりて、こころをすますをりからくさむらのうちより、ひとつのかへる、こと〴〵しくとび來て椽にのぼりて、歌志久がひざのもとうづくまる、はかまのけがるべうおもひてとりすてすつれば、又えんのうへにとびのぼりて、こだみははかまのあひだにかくる、あやしと見るほどに、又くさむらの中よりひとつの蛇のかしらもたげつゝいで來てひたみちこなたをめかれせず打まもり、えんのもとにためらひつけたる、ちひさきものからおそろしげに見ゆ、さては此かへるこそ、此へみにおはれて逃げきつるならめとおもひとりてければ、しきりにあはれになりて、たすけまくおもひたり、やがて蛇のあるかたにかほうちよせて、汝今かへるをはまんとす、われはかへるをたすけまくおもふなり、かへるわが池にすめば、なんぢも又わが庭のくさむらにすめり、汝もかへるも、ともにわが家に住む友ならずして何とかおもふ、われかへるを愛しつれば、汝をも又あいせずやある、汝かへるをはまば、われ又なんぢをころしつべし、なんぢ蛙を食むことやすからましかば、われ又汝を殺さんに何かはあらん、汝蛙をたすくべくは、われ又汝をたすけ、つねにもの與へて食ますべし、汝これをばまもらはゞ、吾また誓ひてたがはまし、汝かまへて蛙を食むことをとゞまるべしとくりかへしていひければ、かのくちなは、たゞくる〳〵とうづくまり居りし、やがてのどやかにはひいでゝ、築山のしげみにいりて、のちふつにいでこず、さながら蛙はなほおそるゝ心やのこりけん、しばしはえんのかたはらにかゞみ居たり、さてゆふべになりて、もろ〳〵のかへるのなきけるとき、やうやくおず〳〵はひいでて、池の中に飛び入りてともに鳴きぬ。

——八島定岡——新著聞集——

大蟇の陳情

松平美濃守下屋敷本所に有り、方三町餘の沼あり、此中に住む一年、故有つて此沼を埋べきよし被二申付一近々彌埋むべき沙汰有りしに、或る日上屋敷の玄關にけんぼう小紋の上下著たる老人一人來りて取次の士にいふやう、私儀御下屋敷に住居仕る蟇にて御座候、此度私住居の沼を御埋被レ成候御沙汰有之段奉二承知一候付參上仕候、何卒此儀御止被下候樣に奉二願上一候旨を申述候、其段可二申聞一とて取次の侍退座して怪しき事に思ひ襖の隙より覗きみるにけんぼう小紋の上下と見へしは蟇が背中のまだらふなり、大さは人の居りたるが如く兩眼かゞみの如し、即刻美濃守へ申達ける處口上之おもむき聞屆候よし挨拶あられ、沼を埋むる事を止られける元文三年のことなり。

——江戸塵拾二——大蟇——

註、けんぼう小紋はけんぱふ小紋（憲法小紋で、慶長の頃京都の染工吉岡仁右衛門（或は又三郎憲房）始めて染出したもの黑茶色に小紋を染め出した染物、憲房後に房を法に改む、憲法小紋の名ここに起る。

蛙に十念

大阪谷町すじ八丁目、願生寺超譽は、隨分の念佛の導師なりし、此寺、本は草庵にて、わづかに三間四面のわらふきの一宇ばかりなりしを、今は佛殿、方丈、庫裡まで悉く成辨してけり、この修營のはじめに、根なき松を二莖門境に植ゑ、もし寺門繁榮せば、この松成長すべしと自祝せられしに、果して欝茂して今大木となれり、又鹽町に閑居の庵を占ひたまひしに、庭の池の中に蛙群れ鳴くに、喧しかりければ、十念をさづけて停止せられしに、生涯のうちは曾て鳴かざりし、元祿九年八月十七日、七十二歳にて豫め滅後の葬式を營み、前十一日より安養の聖衆の數に入りしことゝ覺えて貴く念佛しておはりぬ。

——新著聞集——

蛙は歸る

近頃聞く、淺草福井町に行辨と云ふ山伏あり、予が隱邸隣宅の池の蛙鳴よきとて三四つ取て、かの住る所にある三四尺ばかりなる水溜に放て逃去らざる爲めに、竹簀をかけ四隅に石を鎭に置たり、明朝見れば蛙一つも居ずに或人曰、蛙、和名かへると云は其故也歸の性あるゆゑなりと云ふ、さすれば本庄にや歸けん。

前條のこと咄せしとき、林子云には、幼齡の日大川端の屋輔に住けるが、園中の蝦蟇を捕て物に入置くに、皆逃れ去る、目籠などは別て早く逃ぐ、植木鉢の底に穴一つ明たるをうつぶせて掩へば遲し、又少しも透間なきやうに手當すれば逃ること能はず、全く氣にて漏出るものと見えたり、林子今の八代須の宅地に池あり、林子蛙聲を好めば、本庄品川など都近にて聲よき蛙を年々捕て池に放てども何方へか逃失ふ、因て止ことを得ずして工夫して科斗（おたまじやくし）のときに兩處の溝洫より汲取て放つ是よりして春夏は閣々の聲城中ながら郊坰の外に在る如しと云ふ。

——松浦靜山——甲子夜話——

今樣蝦蟇仙人

余知己廣瀨道覺なる者、幼よりして鳥獸を好で畜ふ、後薩州侯に仕ふ、常に鳥獸の談に及ぶ、此人中年にて武州某の村に村居す時に一の大蝦蟇ありて庭前に出る、是に食を與ふ或蟲類を得る毎に蝦蟇々々と呼時は出て來て其蟲類を受て食ふ、後には相馴て膝上に至る或隣村の里正の宅に往て宿る事五七日簷下を見れば此蝦蟇あり主人及皆出て見て曰く、凡二里餘の處を迎に來る、共に歸るべしと云に因て出て歸られば、此蝦蟇も共に歸ると云、是より蝦蟇仙人の名を得たり其二里餘にして始て尋行くは實に妙なるものなり、余少年の時厨下に一の蝦蟇あり是を數十丁の外に捨て歸る其夜の中に歸來る、又遠きに捨、又歸る是に因て知るかへるの訓當れり、曹懸志曰、蝦蟇無腹、俗說蝦怪蟲、雖ヨ取以置二遠郊一、夕復還、字說云雖或遐之常慕而反と云此の說の如し蝦蟇の奇事往々あり。

——佐藤成祐——中陵漫錄——

笈埃隨筆の川鹿

世の中の事は一概に論じがたし、見ざる事とても疑ふまじきなり、聲あるべきものに聲なく、聲あるまじきものに聲ある也、輟耕錄に云、仁宗帝潛に吉太后と倶に甕を懷孟が家に止め給ふに、群蛙喧しく、太后近侍に命じて旨を傳へ諭さしめて曰、吾母子慣々たる蛙聲の耳を惱さしむる事忍びがたし、自今それ鳴事なかれと制し給ふより、今に至るまで聲をなさずと、又宗季といふ人郡南の池の傍に居るの主春夏の穴とす、喧蛙群り飲食を安んぜず、時に天師張廣京より回るに、是を告て止ん事を乞ふ、廣即ち符籙を新瓦上に朱書して池に投ぜしめ且誡めて再び鳴事なかれと、それより後は此所の蛙は聲なしと、また武陵王或時池亭に飲燕す、蛙聲耳に聒すし、王云遊宴の絲竹を擾る實に憎むべしと、僧法朗傍に在て是を承り、即咒法を修す、蛙忽ち止む、暫くして燕終らんとす、王云、復鳴ん事を欲すと、法朗即云、君王の歡び既に闌なり、汝喧く鳴けと、蛙ども詞に應じて一齊に聲を發して喧聒元のごとし。

我國にも蛙鳴かざる所多し、中にも出羽國最上犬伏永泉寺玄翁和尙の住居の地なり、庭中池有り、蛙多く春夏の間喧しく鳴立て、觀念工夫の妨げなりしかば、その鳴を止め給ふとて今に聲なし、また上野國新田大光院にても源譽呑龍、蛙の口を封ぜられしとて鳴ざる鈴を振がごとく鳴ばとて、川の名も是より名なり、是等道德のいちじるき和漢同日の義なり、爰に云傳ふ山城國井出の里の蛙を取て、付たりと聞けり、諸州にて有べけれど、田舍尋常の蛙の中に放ち置けば、蛙どもロを閉ぢの事なれば、唯常にして閒過ぬべし、京都にて鳴ずとなり、これは井出の蛙の聲勝れて清は八瀨川鞍馬川などの山谷の流にあり、好事啖なるをもつてなり、京の三條白川の橋の邊の人は行て聞くなり、然るに此蟲水上に出ずに一種の蛙の鳴聲有り、昔いづれの青蓮院の して石の下にかくれて鳴く故容易に取得がた宮にや御池に此井出の蛙を放させ給ひしといしもつとも形小く其迅速の物にて水底にあれふこと其餘波といふ、予若狹より丹後へ越しばまた見る事少し、然るに何の十藏とかやいふ人、態々是を飼馴して常に小籠に水を以て時、宮津にてある寺に止宿しけるに、庭なるこれを養ひ、鳴すべきとおもふ時は自ら其鳴泉水に蛙有て鳴く、その聲尋常の蛙のごとく聲を眞似て聞すれば、即ち是より同じく鳴喧しからず、至つて清喨なり（或人曰、蛙聲り後は江府に至り諸侯方に招かれて、夫を聞は十二調子の外なりと不知）予いぶかしく、住僧に問ひしに、さる事あり、昔細川幽齋公丹後在城の時、城州井出の蛙を取寄せて池に放ちおかせ給ふ、その種いまに殘りたる故なりと語りぬ、實に左もとおもひて、世に申傳へしもうきたる事にもあらずと感じ、いよ〳〵心を寄せて聞けり。

又爰に一種の物有り、其聲麗々と清く澄て初夏より中秋の頃まで水底にあつて鳴く、是を河鹿といふ、勢州鈴鹿川は殊に多し、聲律

かさしめて興を添しとなり。

嘉栗云、予が同姓なるもの先年川鹿を養ふ夫はいかにも蛙の形にて色黑く足脛細きものなり、是は冬箱に入て封じ暖なる所の棚に上げて置、春になりて取出すなり、又石持どりの大きなるを俗に牛盜人といふ、これも能鳴くものなり、東川にも西川にもあり、必ず夜に入れば鳴也。されば此食經本草等の說も破り難し、一名二物と心得可か殊に此飼置る川鹿は數年所持す、初冬になれば諸蟲魚と同じく蟄するにや、いつしか干魚の如し、其時は濕りたる砂中に置て閉藏す、翌年中春の頃より水を浸して養へば、自然に生魚となりて次第に肥育し川底に有に同じ、初夏に至れば發聲することと毎年斯の如しと、いかさま奇術といふべきほどなり、世にもてはやし、又一興ある事なり、或年八瀨の人の河鹿を聞に來よかしと語る序に、其河鹿は取得難きものかと問へば、殊に速なるものなれば、能く心得たるものならでは中々捕へ難し所望ならば捕へて參らすべきと云、予夫は重疊の事なり強て賴むよしいひければ、程經て持せ歸りぬ、小さき桶に水湛へ入て上には細き網を張たり、各々悅び座敷に直し池にや放たん桶にや養はんなど云て、先づ其形を見るべしとて網を開き石を取除しかば、水底より飛出る、それ〳〵と騷ぐ間に追々飛出て或は天井或は壁などに引付、又は庭へ飛出るもありて悉く逃ていづちへか行けん、一つもとらへ得ず各々只あれ〳〵といふばかりにあきれ居けるが、後には大笑に成て止ぬ、予退て案ずるにこの河鹿と云ものは世に云傳ふ井出の蛙なるべし、その音聲丹後にて聞し井出の種類といひしと同聲なり、但し和歌には作例なし、是は蛙を詠たればそれなるべし、然るに寺島氏本草綱目を引てゴリとし又圖にもゴリを以てす誤れりといふべし、其說曰、和名抄、載二崔氏食鑑一曰、鯛（和名加良加古）似レ鮎而頰肴鉤也、今加州淺野川多有二之其聲如一是ゴリとカジカと一物とす、聲といひ形と云甚異なり、又本草綱目、黃顙魚、無鱗魚也身尾俱似二小鮎一、腹下黃背上青黑腮下有二橫骨一兩鬚有青群游作レ聲如二牝々一陸機云、性最難死魚也、頰骨正黃之有レ力能飛者也」云々、是も聲と能飛といふものは同じくして、群遊するといふは異なり、しかれば又是をカジカと慥に臆見し難し、予が河鹿をもて井出の蛙の子とするも又詐ならず、又和歌に河鹿といふを詠來らざる證とするのみ、好事の人これを考訂せよ、されば魚には聲有物稀なれば多く疑はし、予日州にありしころ、夏の暮がた暑を避んとて田面を散步しけるに溝川に鳴もの有至て遠く聞に、加卑々々と云ふが如し、怪しと思ひ人に問ければ、クウツなりと、クウツとは石龜の方言なり、その龜と聞ていよ〳〵不審なり、岡崎五升庵にて、この事を語りけるに、庵主は早くも聞いて、誠に龜は鳴くものなり、慥かに見もし聞もしたり、新六帖の中にその聲有る歌ありしと語られぬ即ち尋ね見れば「河越のさとの田中の夕やみに何そと聞けば龜の鳴くなり」とあり。

——石井塘雨——笈埃隨筆——

近衛御門の蝦蟇

今は昔□□天皇の御代に近衛の御門に人倒す蝦蟇有りけり、何也ける事にか有らむ、近衛の御門の内に大きなる蝦蟇一つ有りて、生夕暮に成ぬれば出來て、只平なる石の様にて有りければ、内へ參り罷り出る上下の人、此れを踏て不レ倒ぬ人々無かりけり、人倒れぬれば卽ひ這ひ隱れて失せにけり、後々には人此を知りにけれども、何なることにか有りけむ同じ人此れを踏みて返々る倒れける、而る間一人の大學の衆有りけり、世の鳴呼の者にていと痛う物喰ひして、物謗り爲る者にこそ有りける、それが此の蝦蟇の人倒す事を聞きて一度こそ錯りて倒れめ、然だに知り得なむには押倒す人有りと云ふとも倒れなむやなど云ひて、暗う成る程に、大學より出て女房の知りたりけるに物云はむとて行きけるに、近衛の御門の内に蝦蟇平みて居りけり、大學の衆「いで然りとも然様には人をこそ謀かるとも、我れをば謀からむや」と云て、平み居る蝦蟇を踊り越ゆる程に、押入たりける冠なりければ冠落ちにけるを不レ知ずに、其の冠、沓に當たりけるを「此奴の人倒すは己れは己は」と云て踏□□に巾子の強くて急ともひしげざりければ、蟾蜍の盜人の奴は此の強きぞかしと云て無き力を發して無下に踏入る、時に內より火を燃して前に立て上達部の出給ひければ、大學の衆橋の許に突居ぬ、前駈共火を打振つゝ見るに□□に表の衣著たる者の髻を放て居たれば、此は何ぞ何ぞと云て見騒ぐに、大學の衆音を擧て「自然から音にも聞し食すらむ、記傳學生藤原の某、兼ては近衛の御門に人倒す蝦蟇の追捕使」と名乘るに、此云ふは何ぞなど云て喚ひ嘖りて、此引出よ見むと云て、雜色其寄て引く程に、表も引破れて損じければ、大學の衆わびて頭を掻き捜るに冠も無ければ此の雜色共の取つる也けりと思て、其の冠をば何しに取つるぞ、其れ得させよ得させよと云て、走て追ける程に、近衛の大路に低れにけり、顏を突缺きて血出にけり、然れば袖を被ぎて行ける程に、道に迷て何くれも不思えで行ける程に、辛くして火の見ゆるを見て、人の小家の有けるに立寄て叩きけれども、何にしにかは開けむ、夜深更にければ思ひまどひて、溝邊の有りけるに低し臥しにけり、夜明けて後、家々の人起て見るに、髻放ちたる者の表の衣著たるが顏缺けて血出でたるが、大路の溝邊に臥たれは、此れは何ぞと云て見嘖りければ、其時にぞ大學の衆起て尋ねてぞ返りにける、古へは此の世の鳴呼の者の有ける也、然れども學生にては有りければ、大學の衆にも有りけるなり、然心のはか無き程にては、賢く文を讀み習ひけるはいみじく怪しきことなりかし、然れば人なほわざには依るまじ、只心用るなり、此の事は世にも聞ゆまじきに、其の大學の衆語りけるを聞き繼ぎて、此く語り傳へたるとや。

——今昔物語第四十一——

蛙合戰

高陽院殿の堀に

寛喜三年夏の頃、高陽院殿の南の大路に堀あり、蝦數千あつまりて、方ぎりて食ひあひけり、一つがひ一つがひ食ひあひて、或はくひ殺され、或はかたいきして、はらじろになりてありけり、又も〳〵多く集る事かぎりなし、或者、試に蛇を一つもとめて、その中へ投げ入れたりけるに、少しも恐るゝことなし蛇も亦、のまむともせず、逃げ去りにけり、京中の者、市をなして見物しけり、ふるくも蝦の戰はありけるとかや。

——古今著聞集——

南波市の街道に

續日本紀第二十九、稱德天皇の神護景雲二年七月條に云ふ、庚寅、太宰府言す、肥後の國八代郡正倉院の北の畔、蝦蟆陣を列ぬ、廣さ七丈もありぬべし南に向つて去り、日の暮るゝに及び去る處を知らず。

また同紀第三十八、桓武天皇の延曆三年五月の條に云ふ、癸未、攝津職言す、今月七日卯時、蝦蟆二萬許、長さ四分すべく其色黑く斑あり、南波市南道より南行す、池列三町に至るべし、是に隨つて南行し、四天王寺内に入る、午時に至つて皆悉く散去せぬ、これ世に蛙合戰なり。

——北村久淨——勇魚島——

北野連歌堂の蛙群

正德三年二月、北野連歌堂の前の池に、蛙數萬聚りて鬪ふ、或人云ふ、是異事に非ず、蛙の交るなりと。

——駿府政事錄——

駿河甲山の蛙合戰

慶長十九年十二月六日、今午剋、甲山邊の路次の傍二間四方の草深き處に、蛙幾千萬とも數を知らず、噉ひ合ひ戰ふこと一時ばかり、諸人これを見て、寒天の時分に殊に奇怪なりと。

蛙と蛇の合戰　其他

百練抄　六、崇德、保延四年三月廿一日、神泉內にて蝦蟆鬪諍す。

同　八、高倉、治承四年三月十六日、於二海橋立池一蝦蛆合戰互決二雌雄一、又蝦蟆食二殺蛆一見者如レ垣、賀茂上社同有二此事一云々。

同　九、安德、壽永二年十二月、於二鳥羽南樓門外一蛙與レ蛆合戰、蛆死去謂二咎徵一。

本朝世紀　仁平元年四月二日癸卯、二條櫛笥小路池水邊、蝦蟆相鬪。

百練抄　十六、深草、寶治元年正月十七日辛未、今日東宮若宮鶴岡神前蝗蟲數十萬充滿、亥子時人々見二付之一、翌朝畢之由、後日風聞。

◇

延曆三年五月七日かへる三萬ばかりあつまりて、三町ばかりにつらなりて、難波より天王寺へまゐりにき、此事都うつりのあるべき相なりと申あへりし程に、廿六日にやましろのなかをかに京たつべしといふ事いひきて、人々をつかはして、そのところをさだめさせたまひき。

——水鏡下——桓武——

「嬉遊笑覽」の蛙

蛙の弔ひ

蝦蟆を投て殺し、地に小坎をほり、車前草をしきて死たるかへるをその上におき、また車前草を覆ひ、小兒その周りに居て、「かへるとのお死にやつた、おんばく殿の御とむらひ」と聲々にいひて祝ふに、須臾ありてかへる蘇る、此こと古き事と見ゆ。

『毛詩』芣苢の郭璞が疏に曰く、今車前草大葉長穗、江東呼二蝦蟆衣一。（陸璣「草木疏」にも車前草一名蝦蟆衣とあり。）

『本草啓蒙』に車前、カヘルハ（南部仙臺）又漢名を擧たる「內蝦蟆葉」（青浦縣志）かかれば陸奥にてカヘルハといふは彼兒戲より名づけて漢土の名に符合せしなり。

『蜻蛉日記』山こもりの後はあまかへるといふ名をつけられたりければ、かくものしけり、こなたさまならでは方もなどなけかしくて『おほはこの神のたすけやなかりけんちぎりし事をおもひかへるは』おほはこの神とは、何にかへるのなきちからわざ　長頭丸

『寛永發句帳』

軍場へ面出しせてやひきがへる　親重

『犬子集』

花いくさ今をさかりと見えけらし蛙吠えぬる山吹のかげ

軍にや男うたせてあまかへる

あまたありて擧るにたえず、蛙戰つて死ぬるもの多ければ兒童之を弔ひたるより後には打殺して弔らひしは蛙の合戰常にはあらぬなり。『結毘錄』にも記したり、あまかへるとは蛙は雨を呼といへばなり。『百物語双紙』に今に子供までが、あまかへるどのはいつ死に給ひた

などいひてとむらひける『一代男双子』『秋のなかばから、竿の音のみ里のわらんべ、ねぢかご、あさがへるの家などして。

蛙が目を借る

又『醒睡笑』四、唯有の條、大名の前にて座頭のひたものねぶるを見給ひ、何の仔細にそれほど眠るぞとあれば、昔より春は蛙が目をかりると申傳へて候、それはよき目の事に申

候むや、我らのやうなるあしき目をかり候はよく〳〵蛙のより合に、目のはやる仔細御座候やと申ける』と有り、按るに此諺は春苗代の頃より蛙出ればなり、蛙は目摩ものなれば人の眠りたき風情に見ていひし俗諺と聞ゆ、彼のさまをいひしは宗鑑が

手をついて歌申上る蛙かな

其角が

附木屋の手なり足なり雨かへる

といへる、いよ〳〵をかし。

又、ゑのころ草をもて、かへるを釣とあり『和漢三才圖會』

狗尾草原野多有レ之、小兒用レ之、釣レ蛙戲者。

蛙を食ふ

『枕草紙』に『兵衛藏人を御供にて殿上に人さふらはざりけるほどたゞませおはしますに、すひつの烟の立ければ、かれは何の烟ぞみてこと仰られければ、みて歸りまゐりてわたつみのおきにこがるゝ物みればあまのつりしてかへるなりけり

とそうしけるこそをかしけれ、かへるのとび入てこがるゝなりけり』おもふに火のもゆるすびつの邊りにかへるのかほらんことあるべきやうなし、ひそかに燒てくひなとせしことあるか知るべからず。

『括異志』陳宏泰、家富二於財一、有人假二貸錢一萬一、宏泰徵レ之甚急、其人曰、請無レ慮、吾先養二蝦蟆萬餘頭一、鬻レ之足二以奉償一、泰聞レ之、憫然已二其償一別與二錢十千一令悉放二之江中一。

『天祿識餘』韓退之答二柳々州食蝦蟆一詩あり、又按るに『周禮』蠏氏所掌蛙黽之屬、『漢書』霍光檀減二宗廟羞鬼蛙一古蓋以爲二上食一といへり。

かじか

『北窓瑣談』かじかと云もの近きころ人の希々養ひ樂むものなり、聲さやかにて駒鳥に似たり、廣きざしきなどには飼おきてよきものなり、北山矢せ小原邊の谷川の流れ清き處に住むといふ。

『本艸』中に錦襖子と見えたる是なりとぞ形は雨蛙より少し大に脊て疵瘡あり色黒し雨蛙に似て物に飛付て止る、先年人のもとにてよくみて寫生をしたりしに其時籠より一つ飛出て天井にとまれるやうあまかへるの如し指先まろくひらたし『本草啓蒙』にその聲小にして清く抑揚多し七返反するものを上とす、好事者生蠶を以て畜ふ別にその器ありといへり。

——喜多村信節——

蛙の故事

井底之蛙、人の寡聞なのを井中に生活する蛙に喩へて曰ふ。

莊子秋水篇に、井蛙不レ可二以語一於海一者、拘二於虛一也、夏蟲不可二以語一於水一者、篤二於時一也、曲子不レ可二以語一於道一也。

蛙　皷　蛙の聲の皷のやうなのをいふ、僧惟則の詩に、『樹根蛙皷鳴殘雨』とある。

蛙　市　蛙の群つて鳴くことをいふ、葛長庚の詩『翠麓夜飲序』に『草螢鬪燈、田蛙作市』とある。

蛙鳴蟬噪　蛙や蟬の鳴き噪ぐ如く喧しきを曰ふ碩劣なる議論又は文章を嘲るの意、韓愈の平淮西碑の諸欣の評に

殷文昌以駢四儷六、蛙鳴蟬噪之音、易二鈞天之奏一、直不レ知二人間有一羞恥事一。

蝦蟇と神仙

蝦蟆は不思議な仙蟲として、神仙に關係のあるものが屢々現はれる。其第一

劉海蟾

である劉海蟾は支那勃海の人で、金に仕へて相位に至つたが、後、印を納めて終南に入り道を學び仙となつた手に三足の蝦蟆を弄ぶ蝦蟆仙人といふのは此の仙人で、京都知恩寺所藏國寶顏輝筆は鐵拐仙人と双幅で有名である畫題として面白いので、よく描かれ、此の外に明兆の作が東福寺にあり、雅邦や芳崖もこれを描いてゐる、次は

潛翁

で、翁は隋の開皇中に漳州石壁山に白蝦蟆を養つて形を練りこれを隨へてゐた、それから、次の一人は

周廣眞

と云ひ嚴州の人、これは女の仙人で既に一旦他家に嫁したが、その夫に別れて道を修しよく大蝦蟆に乘つて海を渡り名山に遊んで、曾て何仙姑に逢ふ、何仙姑の曰く汝は凡を超え聖に入らんとするか、形を留めて世に住まんとするかと、對へて曰く母有願くは奉じて養ひ終らんと、幷で形を留め世に住み、後德壽宮に入つて生涯を終つた、その蝦蟆に乘つて海を渡るの圖が收めて有像列仙傳にある。

蛙の繪畫

繪畫に現はれた蛙としては高山寺の傳鳥羽覺猷筆『鳥獸戲畫卷』の蛙が先づ第一である縱横無盡に活寫した白描の筆致は、蛙と猿と兎を主要な主人公として千變萬化、その姿態を描くに自由自在を極め將に驚異に値するものがある、鳥獸戲畫卷前に鳥獸戲畫卷なく、此の以後にも亦これを見ない。

元來あまり大きな動物でないから、ほんの小品に描かれるか畫贊などのある俳畫向のものが多い、その中で椿山の『蒲塘秋艷』は椿山の作の中でも瀟洒な筆致掬すべきもので構圖も中々面白い、橋本辰二郎氏の所藏品で蓮の花僅かに咲き殘る池塘に金線蛙一匹を描いた、それが眞に活きてゐる、華山には有名な蟲魚帖があり、その第一圖が蛙でこれも實によく寫してゐる、抱一には落花に蛙を一つ描いて『宵闇や水なき池に鳴く蛙』と題したものがあり、同じ落花に蛙では田中訥言にも餘情の深い作がある、蕪村にもあれば、芦雪にもあり殊に芦雪には放膽な筆致で全紙に墨痕淋漓と描き出した覇氣横溢の作もある、近頃の作では昭和十四年京都で開かれた展觀に竹内栖鳳翁の『野月』が素晴しい作であつた、安田靫彦氏が瘦蛙の句から描いた『一茶』は七絃會の出品で面白い出來である此の外近く蛙を描いた作に左の諸點がある。

酒井　三良筆『　淵　』第十五回院展出品
北大路魯卿筆『蝦蟆圖』個展圖錄所載
小茂田青樹筆『蟲魚圖卷』第十六回院展出品
井之川知白筆『沼畔小景』第十五回院展出品
竹内　栖鳳筆『蛙と蜻蛉』第十五回帝展出品
小茂田青樹筆『綠　雨』第　回院展出品

蛙の和歌

思ほえず來ましし君を佐保川の河蝦(かはづ)聞かせず還しつるかも　　按作　益人
佐保河の清き河原に鳴く千鳥蝦(かはづ)と二つ忘れかねつも　　作者　未詳
吾が疊三重の河原の石のうらに斯くしもがもと鳴く河蝦(かはづ)かも　　伊保　麻呂
み吉野の石本去らず鳴く蝦(かはづ)ろべも來鳴きけり河を清けみ　　作者　未詳
神名火の山下響み行く水にかはづなくなり秋と云はむとや　　作者　未詳
草枕旅に物念ひ吾が開けば夕片設(まけ)て鳴くかはづかも　　作者　未詳
瀬を速み落ち激(たぎ)ちたる白浪にかはづ鳴くなり朝夕ごとに　　作者　未詳
上つ瀬にかはづ妻呼ぶ夕されば衣手寒み妻まかむとか　　作者　未詳
朝霞香火屋が下に鳴くかはづ聲だに聞かば吾繼ひめやも　　作者　未詳
朝霞香火屋が下に鳴く蝦(かはづ)しぬびつゝありと告げむ兒もがな(萬葉)　　河村王
かはづなくよし野の川の瀧の上にあせみの花ぞさきて散ける　　山部　赤人
諸聲にいたくなきそさもこそはうきぬの池のかはづなりとも　　前大納言兼家
まだとらぬ早苗の末はなびくなりすだくかはづの聲のひびきに　　慈鎭　和尙
庭のおもはひとつにみゆるうき草をここぞみきはと蛙なくなる　　寂蓮　法師
はるふかみさやまの池のねぬなはのくるしけもなく蛙なくなり　　仲實　朝臣
谷川の清き瀬ごとにみかくれてつまよぶかはづ聲きこゆなり　　藤原　忠房
いかばかりいぶせかるらんこやの池のみくさのもとにすだく蛙は　　源　兼昌
小山田に夜なくかはづ苗代の水のしたにもめやさますらむ　　作者　未詳
朝霞香火屋が下に鳴くかはづ聲だに聞かば吾繼ひめやも　　信實　朝臣
朝霞香火屋が下に鳴く蝦(かはづ)しぬびつゝありと　　作者　未詳
はるふかみ花散りかゝるやまの井のふるきしみづにかはづ鳴くなり　　藤原　定家
川風は井出のうき草吹きわけてよるべの浪に蛙鳴くなり(夫木集)　　鎌倉右大臣
水がくれにすだく蛙の諸聲にさわぎそめたる井手のうきくさ　　藤原　家隆
夕ざればかはづ鳴くなり飛鳥川瀨々ふむ石のころび聲して　　僧　良遲
夕川の櫻がもとにのりすてし筏のとこにかはづなくなり　　上田　秋成
河のべの苗代ぐみも色づきてにほふ夕日にかはづなくなり　　加納　諸平
賤のをが今朝せき入れし苗代の水にはやくもなく蛙かな　　千種　有功
あらし山花の光もくれゆけばとなせのおくに蛙なくなり　　熊谷　直好
ゆけどゆけどなほ水上に聞ゆなりかはづ鳴く瀨やいづこなるらむ　　僧　亞光
水あせてなかば野となる澤水の菫が中に蛙鳴くなり　　植松　茂岳
陰面の小川の水澁(しぶ)見えそめて春日うらゝに蛙鳴くなり(名歌選)　　井上　文雄
　　僧　辨玉

蛙の漢詩

蛙聲　明　徐渭

紅芳綠漲綠連天、夾岸蘼蕪匝澗灣、別有鼓吹喧渡口、不教蚯蚓疊陽關、殷郎咄々書空易、漢吏期期奉詔難、華苑公私猜與午、華門俗屈課殷盤、連菅甲卒枚前鬨、塞寺沙門呪後餐、蟾蜍借月瘖何謂、科斗縈波字與翻、蒲潦溽蒸號太酷、梅風颼蕩控宜寒、使車南詣雕題譯、貝葉西來鳩舌彈、金响俠徒丸儘落、珮垂戰士怒彌殷、諧語就苔方乞半、孤雛隔乳未啼殘、韓馮枕荷愁喧寐、戴勝降桑許聒眠、利口嗇來饞喋々、薄言鉦罷、鼓闐々、咽競笳烏不得曉、雜沸蓮露幾時圓、迢々來度天姬悵、閣々廻驚釣者船、搖繁藻鏡驅成瀨、韻碎菱絲詎可穿、寄語艸深瓜爛處、忽呼即旦備蚿憐。

題白渡方氏聽蛙亭　宋　劉克莊

塘水拍隄科斗生、想君亭子俯幽清、黃梅雨足野田潤、牡麴煙收邨墅晴、莫信人嫌無理鬧、頗疑渠有不平鳴、畫堂方喜聽琴阮、誰愛天然律呂聲。

蛙鼓　明　朱之蕃

徑滿蓬蒿沼滿蘋、產蛙相怒復相親、中宵磔格連清曉、過雨喧闐送晚春、獨聽鐃歌矜戰勝、共徵散部樂延賓。郊坰寂靜偏憐汝、伴我書齊不厭貧。

蛙　明　張維

熟梅天氣雨初收、何處蛙聲隔水樓、鼓吹翻嫌驚好夢、公私誰爲亂閒愁、薰風候已違花信、碧艸涼應動麥秋、赤鯉聞雷爭變化、爾能燒尾躍雲不。

蛙（二月十五日雨作）　元　倪雲林

風軒紅杏散餘霞、堤草青々桃欲花、寒食清明看又近、滿川煙雨亂鳴蛙。

同　唐　吳融

穉圭倫鑒未精通、只把蛙聲鼓吹同、君聽月明人靜夜、肯饒天籟與松風。

聞蛙　朱熹

雨蛙盛怒鬪春池、群吠同聲徹曉惟、等見一場狼藉去、更無人與問公私。

夏雨　金　祝簡

電掣雷轟雨覆盆、晚來枕簟頗宜人、小溝一夜深三尺、便有蛙聲喧四隣。

張園雜賦　元　錢惟善

清夜無眠疊鼓催、竹梢垂露點蒼苔、滿池月色如霜白、一片蛙聲似雨來。

和聞蛙　宋　楊萬里

春來眞底好、此輩正縱橫、身外泥中計、聲從雨後增、北人飡未慣、南食眠猶生、灰洒知虛實、於渠似可行。

僧池青蛙　謝翺

隱見多無定、時開一道萍、瘦分荷背白、身帶蘇之青、吐雹收寒井、隨僧入夜缾。柏壇祠後稷、應作蟄龍靈。

南池宴錢亭子賦得科斗子　金　岑參

臨池見科斗、羨爾樂有餘、不憂網與釣、幸得免爲魚、且願充文字、登君尺葉書。

◇

飛隨芳樹霞衣好、港宿淇花粉夢香。沈天孫粉凝薄翅春無刀、恨入脩眉晚斷場。馬孫最嫌神女來行雨。只愛西施去採香。徐夤

蛙の俳句

歌の道になれもさし出の蛙かな　宗因
手をついて歌申上ぐる蛙かな　宗鑑
古池や蛙飛び込む水の音　芭蕉
から井戸へ飛びそこなひし蛙哉　鬼貫
蓮池に生れてもとの蛙かな　言水
何の役に立たで釣らるゝ蛙かな　來山
松風をうちこして聞く蛙かな　丈草
田の畔や虹を背負ふて啼く蛙　去來
よしなしやさでの芥となく蛙　嵐雪
春なれや田の青のりになく蛙　許六
田の庵やかはづ飛かふ四ばしら　北枝
我ものと蛙啼くらん西行田　支考
山の井や墨のたもとに汲む蛙　杉風
雨雲に腹のふくるゝかはづかな　千代女
苗代の色紙に遊ぶ蛙かな　蕪村
橋渡る人にしづまる蛙かな　涼蒐
ここかしこ蛙なく江の星の數　其角
雨の蛙聲音になるもあはれなり　素堂
諸聲やうき藻にまとふむら蛙　太祇
こもり江や雲母うく水に啼く蛙　召波
橋守に須磨の千鳥や啼く蛙　也有
傾城のもの干すかたや啼く蛙　蓼太
三日月も影踏みにごすかはづ哉　几董
酒星を見に出て蛙きく夜かな　白雄
蓬生に身をうちつけて啼く蛙　曉台
並び居て鍬にかゝるな田の蛙　闌更
浮しづむ夜のけしきを啼く蛙　士朗
我からと藻屑の中に啼く蛙　巣兆
蕗の雨おのが二月と啼く蛙　成美
瘦蛙負けるな一茶是にあり　一茶
麻の種三粒持てもきく蛙　乙二
立よれば松の月夜や啼く蛙　蒼虬
草の戸や炙する夜に啼く蛙　五明
初かはづ麻の二葉にさし向ひ　梅室
蛙なくや小雨ふる夜の月明り　魚淵
流れ木に尻聲寒き蛙かな　移竹
門しめに出て聞て居る蛙かな　子規
草の戸に艶書合せやなく蛙　虚子
さる程に蛙合戰ひきあげぬ　四方太
萬葉の講義聞く夜や啼く蛙　三允

雨蛙

火をうてば軒に鳴きあふ雨蛙　丈草
麥わらの家してやらん雨蛙　智月
雨蛙芭蕉に入りて吹かれけり　其角
若竹の聲や音かす雨がへる　桃隣
脚のばす虎が泪の雨がへる　土芳
雨蛙いく筋ふりて栗の花　尙白

河鹿

河鹿鳴いて石ころ多き小川かな　子規
川上は茂りにくらし河鹿啼く　月斗
室生寺の一宿河鹿澄みにけり　同
彳みつ河鹿聞くなり朱の橋　伏兎
遠河鹿鳴くにおどろの晝の雷　風可

蟇

這ひ出よかひ屋が下の蟇の聲　芭蕉
そこのいて竹植ゑさせよひき蛙　樗堂
深草の鶉ともならで蟇の聲　曉台
月の句を吐てへらさん蟇の腹　蕪村
雲を吐く口つきしたりひき蛙　一茶
まかり出たるは此藪の蟇にて候　同

蝸牛概說種類

蝸牛は、『かたつぶり』『まひまひ』『でむし』『まひまひつぶり』などの別名があり、軟體動物腹足類で、陸上に棲息する、體は極く柔軟で介殼は螺旋狀をなし、體を縮める時は全く此の介殼の中にかくれてしまう、頭には二對の觸角があり、上なる一對は長く、眼がその末端にある、下の一對は短い、兩性生殖器は概ね其間の一門を右側上觸角の根基に接して開き口腔中上部に位する顎板は半月形にして其の緣に多少の齒狀突起がある、足の前腹側にある粘液線は口の下の所で開きこれから粘液を出しこれで歩行する、だから液が固まれば歩行することが出來ない、冬になると石灰質と粘液とで固められた蓋で殼の口を密閉し古い壁の窪みなどを求めて冬眠し夏になつて活躍する。

蝸牛、蝸螺、山蝸、蠢牛、土牛兒などいろ〳〵の別名があり、『かたつふり』は片角振りで、觸角を片一方づゝ振ること、『まひまひ』は『舞ひ舞ひ』で觸角を動かすこと舞ふが如き意、出々蟲は角即ち觸角を出すの意である之は海中に棲息してゐたものが環境の變化により、全く陸上の動物となつたものである。

蝸牛には凡そ三十二種ほどの種類がある、主なものを左に擧げる。

鼈甲蝸牛　本邦産中の大形のもの螺層低く四階半で琉球大隅大島德之島邊に分布する。

堅蝸牛　小笠原島の特産で中形の蝸牛、螺層は五階半で極く堅固なので此の名がある。

締口蝸牛　本州四國九州等に分布する極く小型のものである。

田螺態長蝸牛　田螺に似て細長く臺灣の特産、多く樹上に生活する殼は黃地に線がある。

口紅蝸牛　關西地方の代表的のもので、殼の口邊やゝ厚く紅色を呈するので此名がある

三筋蝸牛　殼の表白色若しくは淡黃色で、多く三條の褐色帶を有するので此の名がある、關東地方に普通見られる桑や野菜に大害をなし、夜間多く活動する。

一筋蝸牛　これは前種より大型で、螺層六階、殼の口は丸く口邊白色である、九州地方に多く、一條若しくは二條の線ある。

左旋蝸牛　蝸牛中大型に屬し、關東から東海道全般に分布し其西境は伊勢を境とし北は陸奥北西は佐渡越後に及ぶ、五月末から七八月の交盛に活躍し、桑の樹の大敵蟲として知られてゐる。

黑岩蝸牛　本邦産中最大のもので、直徑五〇粍、高さ三〇粍に達し右旋の殼で大體三筋蝸牛と同樣である、主として高地に棲息し、信濃飛驒にあつては普通に見られ、加賀の白山、畿内の比叡山、伊吹山、那智山邊に分布する。

薄皮蝸牛　介殼が極く薄く、破損し易い小型の蝸牛なので此の名がある、螺層五階で縫合顯著に、北海道を除き、全國的に分布し、四國に群生して農作物に大害をなす。

此の外に、**樺太蝸牛、おなじ蝸牛、ひるげんまつまい、おほけまつまい、おほべそまい**などの種類がある。

蝸牛の詩歌と故事

蝸牛賦

馬吉甫

蕤賓仲月、逆旅孤亭、薄宦春罷、閑門晝扃、雲漫々兮、雨冥々、荷葉紅兮、苔蘚青卷、陰風於北幌而閑、皓月於南欞而觀、蝸牛之蕃育、何詭錯之殊形若、乃順陰而起、背陽而化、貪緣於草木、縈委於叢樹、底厭以徐廻、循牆隅而亂下、織角內舊寧、交觸氏之兵、堅殼外圍、終結野人之舍、闕爪牙兮自達、無羽翼兮相借、本忘情於蚌守、亦何憚於鴟嚇、故其投迹多閑冥心寡、欲進不奔、競退非欽喙、吸大道之淳精、體中庸之止足、匪徇物而無悔、恒居冲而守樸、昇清流兮不爲龍、頓黃汙兮不爲辱、岩螺識之可量、何蜺智之能較、借如海蛤無脛、江龜有靈、懷珠胎以自伐、韜玉兆以先形、蜮之捕也、後黃雀而寧懼、魚之貪也、前翠竿而不驚、觀萬夫而恕、已會千載而作程、乃知無用之爲用、求生而表生。

白居易

蝸角之爭

戴晉人曰、有所謂蝸者君知之乎、曰然有於蝸之左角者曰觸氏、有於蝸之右角者曰蠻氏、時相與爭地而戰、伏尸數萬、逐北十有五日而後反。——莊子——則陽篇——

蝸牛の和歌

家をすてぬ心は同じかたつふりたちまふべくもあらぬ世なれど　土御門院御製

牛の子にふまるな庭のかたつふり角のあれはとて身をな賴みそ　寂蓮　法師

家は捨すなにかなにはのかたつふり津の國ありと身を賴むらん　藤原　爲顯

さても世にとまらんことはかたつふり家をおひつゝいづちゆくらん　中島　廣足

風そよぐ竹のはやまのかたつふり世はさはかしと身をかくすらん　常　操

國をさげ家をもおひて行くむしのちからまことに牛にまされり　下河邊長流

かひありとたのむもはかなかたつふりこれはおもひの家ならぬかは　伴　蒿蹊

何かせむかちえたりとて蝸牛角ふり立つる程もなき世に　福田　行誡

身ひとつをいへにをさめて蝸牛ころひろくや世をわたるらむ　嚴如　上人

狂言『蝸牛』（くわぎう）

仕手　山伏
アト　主
小アト　太郎冠者
道具　法螺貝

シテ次第、フシ「大峰かけて葛城や、葛城や、我が本山に歸らん。是は出羽の羽黑山より出たる山伏。此の度大峰葛城を致し。唯今が下向道でござる。まづそろり〳〵と參らう。まことに。山伏といふ者は、野に伏し山に伏し。或は岩木を枕とし。難行苦行。捨身の行ひをするによつて。その奇特には。今目の前を飛ぶ鳥も。祈り落す程の行力じや。いや今朝とふ出たれば殊の外ねむたい。どれへぞ立寄つて。寢て行きたいものじやが。幸ひ是に藪がある。まづ中へ這入つてみよう。えい〳〵やつとな。さても〳〵。びやう〳〵と打開いた。大きな藪じや。さらば此邊りで寢て行かう。えひ〳〵〳〵。あゝ。らくやの〳〵。アト「これは此あたりの者でござる。某壽命目出たい。祖父御をもつてござる。これに蝸牛を進上申せば。猶々御壽命御長遠なと申す。まづ太郎冠者を呼出し。申しつくる事がござる。太郎冠者あるか。小アト「はあ、アト「ゐたか、小アト「お前に、アト「念なう早かつた。汝を呼出すは別の事でない。何とこちの祖父御のやうな。目出たいお方はあるまいな、小アト「御意なさるゝ通り、目出たい祖父御樣でござる、アト「さてこれに蝸牛を進上申せば。猶々御壽命御長遠なと申す。それにつき汝は太儀ながら。今からいて蝸牛を取つてきてくれい、小アト「畏つてはござれども。蝸牛と申す物は。どのやうな物やら。又どこ許にあるものやらも存じませぬ。これは御赦されませ、アト「藪に澤山ある物じや、小アト「あの藪に澤山ござりまするか、アト「まづ頭のくろいもので。腰に貝をつけ。折々は角を出す物じや、小アト「あの角を出しまするか、アト「功量を經たは。人ほどもあると聞いた。隨分念をいれて。よい蝸牛を取つてきてくれい。小アト「そのだんはそつとも。お氣づかいなされまするな、アト「急いでいて。頓て戻れ、小アト「はあ、アト「えい、小アト「はあ。これは過念な事を仰附けられた。まづ急いで參らう。まことに。こちの祖父御樣のやうな。目出たいお方はござらぬ。之に蝸牛を進上申せば猶々御壽命御長遠なと申す。いや何かと云ふうちに藪へきた。まづ中へ這入つてみよう。えい〳〵やつとな。さても〳〵びやう〳〵と打開いた。大きな藪じや。さて彼の蝸牛は。どこ許にある事じや知らぬ。まづ頭の黑い物で腰に貝を附け。折々は角を出すと仰せられた。あれに頭の黑い物が寢てゐる。まづおこして尋ねう。なう〳〵ちよつとおきてたもれ〳〵。シテ「むゝ。むゝ寢た事かな〳〵。たつた一寢入りにした。はあ今おこいたは汝か、小アト「さやうでござる、シテ「して何の用でおこいた、小アト「近頃卒爾ながら。若しお前は、蝸牛殿ではござらぬか、シテ「何じや蝸牛でないか、小アト「さやうでござる、シテ

「それはまたどうした事じや、小アト「蝸牛と申す物は。頭の黑い者と承つてござる。見ますれば。お前の頭が黑ふござるによつて。若し蝸牛殿ではござらぬかと申す事でござる、シテ「何と云ふ。身共の頭が黑いによつて蝸牛でないかと云ふか、小アト「左樣でござる、シテ「暫く夫に待て、小アト「心得ました、シテ「笑これはいかな事。山伏をとらへて。蝸牛でないかと申す。き奴は愚者さうな。さん〴〵なぶつてやらうと存ずる。やい〳〵汝は仕合せ者じや。身共は蝸牛じや、小アト「すれば私は仕合せ者でござる。が。蝸牛は。腰に貝が有ると仰せられましたが。貝がござるか、シテ「貝が見たいか、小アト「見たうござる、シテ「追つ附け見もてやらう。暫くそれに待て、小アト「心得ました、シテ「そりや〳〵〳〵何と見事な貝であらう、小アト「寔に見事な貝でござる。又折々は。角を出すと仰せられました。角がござるか、シテ「何じや角が見たい、小アト「中々、シテ「暫くそれに待て、小アト「心得ました、シテ「これはいかな事、此角にはほうどつまつた。何としたものであらうぞ。致しやうがござる。やい〳〵「角を見せうが。必ず人に云ふな、小アト「いかな〳〵申す事ではござらぬ、シテ「つうつとそれへ出よ、小アト「心得ました、シテ「そりや〳〵〳〵、小アト「まことに角が出ました。すれば疑ひもない蝸牛殿でござる、シテ「して蝸牛を尋ねて何にする、小アト「さればの事でござる。賴うだ者が、壽命目出たい祖父御をもたれてござる。是に蝸牛を進上申せば。猶々御壽命。御長遠なと申す。それゆへ蝸牛を尋ねまする。どうぞ。どうぞお出なされて下され、シテ「それはいてやりたいものなれども。此中方々の祖父御に蝸牛が流行つて一切閑が無い。得行くまい、小アト「それは氣の毒でござる。お目にかゝつたが幸ひでござる。先約をお斷りなされて。どうぞ。私の方へお出なされて下され、シテ「夫程に云ふによつて。いてもやらうが只は行かれぬ。汝に負はれて行かう、小アト「私は非力にござるによつて。どうぞ。歩いてお出なされて下され、シテ「いや〳〵歩いては行かれぬ。それならば。囃子物にのつて行かうか、小アト「してそれはむつかしい事でござるか、シテ「別にむつかしい事ではない、物といふ事じや、小アト「何とでござる、シテ「雨も風も吹かぬに、出ざかま打割らう。でざかま打割らうと云へば。身共が。でぬ〳〵虫々、出ぬ〳〵むし〳〵と云ふて。浮きにういて行く事じや、小アト「それならばまづ申してみませう、シテ「さあ〳〵。云ふてみよ、小アト「雨も風も吹かぬに。出ざかまうち割らう〳〵。何とかうでござるか、シテ「さうじや〳〵。さあ〳〵はやせ囃せ、小アト「心得ました。雨も風も吹かぬに出ざかま打割らう。出ざかま打割らう、シテ「でぬ〳〵虫々。でぬ〳〵虫々。でぬ〳〵虫むし、小アト「雨も風も吹かぬに出ざかまうち割らう。出ざかま打割らう、シテ「でぬ〳〵虫むし。でぬ〳〵虫むし。でぬ〳〵虫むし。でぬ〳〵むし〳〵、アト「最前太郎冠者に蝸牛を取りに遣してござる。あまり歸りが遲い。見に參らうと存ずる。これはいかな事。やい〳〵太郎冠者、小アト「えい賴うだお方、アト「汝は何をしてゐる、小アト「唯今蝸牛殿をお供致

すところでござる、シテ「やい〳〵はやさぬかひやい〳〵、小アト「心得ました。雨も風も吹かぬに。出ざかまうち割らう。〳〵、シテ「でぬ〳〵虫むし、〳〵。でぬ〳〵虫むし、アト「これはいかな事。き奴はぬかれをつたさうな。太郎冠者。〳〵。やい太郎冠者。汝はうつけた者じや。あれは山伏じや、シテ「やい〳〵はやさぬかひやい、小アト「こなたは山伏じやげな、シテ「粗忽千萬な。山伏といふ事があるものか。功量を經たな、小アト「おゝ、シテ「むし〳〵、小アト「雨も風も吹かぬに。出ざかまうち割らう。〳〵。シテ「でぬ〳〵虫むし〳〵。でぬ〳〵虫むし。アト「扨て苦々しい事かな。太郎冠者。〳〵。やい太郎冠者、小アト「やあ、アト「氣をはつたりとも。あれは山伏で賣僧じやわいやい、小アト「さては山伏に極りましたか、アト「おゝさて山伏に極つた、シテ「やい〳〵はやさぬかひやい〳〵、小アト「やいそこな奴、シテ「何じや、小アト「己は山伏で賣僧じやげな、シテ「でぬ〳〵虫むし。〳〵、小アト「あれ〳〵角を出します、シテ「でぬ〳〵虫むしでぬ〳〵虫むし。でぬ〳〵むし〳〵、小アト「雨も風も吹かぬに。出ざかま打割らう。〳〵、アト「さても〳〵苦々しい事かな、シテ「もそつとなぶらう、アト「太郎冠者。〳〵。やい太郎冠者。さりとては氣をはつたりとて。あれは山伏で賣僧じやわいやい、賣僧に極りましたか、アトせい、小アト「心得ました、アト「己は憎い奴の、小アト「己は憎い奴の、アト「やあ。どれへやらいた、小アト「どれへやら參りました、シテ「でぬ〳〵虫々、二人「あゝ、シテ「うつけよ〳〵、アト「どれへ行く、小アト「あれへ參りまする、アト「ちやつと捕らへさつしやれ、二人「やるまいぞ〳〵、シテ「うつけよ〳〵、二人「やるまいぞ〳〵。

謡曲「龍虎」から

靑類なれともかくの如く、其の勢を顯はして何をかさのみ、あらそひの、蝸牛の角の上にして、はかなや何事を、爭ひは人の身も、替らぬ物を世の中の習ひなればや畜類の、戰ふことも 理(ことわり)や。

同「賴政」より

「血は涿鹿の河と爲りて、紅波楯を流し、白刃骨をくだく、世を宇治川の網代の波、あら鬪浮繼しや、伊勢武者は皆緋威の鎧着て、宇治の網代にかゝりけるかや、うたかたの、あはれはかなき世の中に、「蝸牛の角の爭ひも、はかなかりける心かな」。

百蟲譜の蝸牛

蝸牛はたゞ、水にあるべきものゝ、いかで草葉に遊ぶらん、家は持ちたれども、行く先々を負ひあるく、水雲の安きに似ず。

——横井也有——

蝸牛贅

梢による物は風のおそれあり、土にかくるゝものは雨のうれひあり、かの蓮嵐が車二つに積むといひしも、此安きにはしかず。

——同——

巴人亭記

蝸牛の角をちぢめてはいり、蟹の甲に似せて穴を掘るも、家といふもの無くて叶はねばにやあらん、かりこもの亂れし菰打ちかぶり露霜の宿なしとも身をはふらかし棄てざらん限りは、膝を容るゝの窮屈ならんより、足のばすほどの家居なからんやと、新にひとつの宿りを占む、もとより二尊堂にいまし、妻子室にみてり、その緣側の端つ方にひとつの妻戸をひらきて入れば、ひろさわずかに十疊ばかり、ここに四方の客人を迎ふ。

——太田南畝——

歌謡の蝸牛

梁塵秘抄

◇をかしく舞ふものは、巫(かうなぎ)、小楢葉(なら)、車の筒とかや、平等院なる水車、はやせば舞い出づる蟾蜍(いばぢり)、蝸牛(かたつぶり)。

◇舞へ舞へ蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴(く)させてん。踏破せてん、眞に美しく舞うたらば、華の園まで遊ばせん。

諸國童謡

◇蝸牛、かいつぶり、湯屋に喧嘩があるから角出せ、槍出せ。

◇蝸牛、角出せ槍を出せ、挾ん箱出しやれ、出さぬと〳〵、表に喧嘩があるぞ。(江戸)

◇でんで(蝸牛)こない出やつせ、でんでこない出やつせ、太皷のぶちをかへてやろ。

◇でんでこない、でやつせ、早よ出やな、角折るぞ。(伊勢四日市)

◇め—め—こんしよ—(蝸牛のこと)つのだせこぬか三升や—ろに。(三河)

◇だいろ—、だいろ—(蝸牛)角出せ、角を出さぬと代官所に願ふぞ。(甲斐)

◇めゑ〳〵かんか、めいめいかんか、角出せ、出さねエと、己れが家が焼けるぞ、焼けても知らねアで、まだ角出ぬ。(常陸)

◇えーぼろつぼろ(蝸牛の方言)角出して見せぬと、へそくそぐつと。(下野)

◇蝸牛、によ〳〵角出せ角出せ、角ださねば御寺の鐘に持て、ちよき〳〵しましよ、しましよ。(越後新發田)

◇蝸牛〳〵、角出せ、汝(うん)が出せば我も出す。(越後中魚沼郡)

◇でん〳〵でんの蟲、出たり入たり、シヤーらんな。(因幡)

◇もつ〳〵(蝸牛)角出せ、燒いても噛もう。(出雲)

◇かたつむり〳〵、角出せ、河原の婆が、豆を炒つて食はす。(土佐幡多郡)

狂歌

かたつむりつのりて降れる夕立に川のせ中もうづやまくらん　參二

思ひたつ旅は伊勢路のかたつぶり笠の上より津のみゆるかな　光就

うしの子がのろり〳〵とかたつぶり角をふりては我が家を引く　藏吉

五月雨の垣に角出す蝸牛あちらへもふりこちらへもふり　數廣

はふかきの內をもまもれ蝸牛なれも二ほんの角大師ほど　行成

方丈のきにむくかたへ蝸牛なれもうき世をうしとみなして　湖鯉舫

花さかせ爺とためしにかたつふりかれたる枝にはひかけるなり　卯波羅

這ふなりも一つ巴のかたつむり此袖垣のもんどころかも　喜丸

川柳

蝸牛きげんがよいと角を出し。

なめくじり宜き道づれと蝸牛。

多胡の碑に吸付て居る蝸牛。

家も脊負出すかと女房蝸牛。

御隱居は炬燵に一人蝸牛。

◇

蝸牛が角を出すは己が遊山なり　京傳

蝸牛の俳句

かたつふり角振わけよ須臾明石　芭蕉
文七にふまるな庭のかたつふり　其角
かたつふり酒の肴に這はせけり　同
鎌倉やむかしの角の蝸牛　同
白露や角に目をもつかたつぶり　嵐雪
蓑蟲の角やゆづりし蝸牛　素堂
ころ〳〵と笹にこけ落し蝸牛　杉風
笹の葉に何とて寢たる蝸牛　支考
橋に來て踏みふまずみ蝸牛　桃隣
蝸牛折角這うてこけにけり　移竹
蹇の三熊もふでやかたつふり　蕪村
關越ゆるいざり車やかたつぶり　同
點滴にうたれて籠るかたつふり　同
こもり居て雨うたがふや蝸牛　同
かたつふり何おもふ角の長短か　同
雨にとまる玉水の宿の蝸牛　同
蓑蟲はちゝとも鳴くを蝸牛　同
摺鉢をつかめば夜べの蝸牛　同
壁漆の來ぬ暇ありかたつぶり　同
親と見え子と見ゆるあり蝸牛　太祇
夜を寢ぬと見ゆる歩みや蝸牛　同
あつわひて這うて出でけむ蝸牛　同
怠らぬ歩みおそろしかたつふり　同
引入れて夢見顏なりかたつふり　同
折あしと角をさめけむ蝸牛　同
來し跡のつくが淺ましかたつふり　同
今朝見れば夜の歩やかたつふり　同
角出して這はでやみけり蝸牛　同
角文字の庵に題すかたつぶり　几董
三日月の木ずゑに近し蝸牛　同
ひよんの木の落てありしや蝸牛　同
かたつふりけさとも同じあり所　召波
夜べの雨馬蘭に殖えぬ蝸牛　同
竹の子に脫ぎ捨られぬ蝸牛　也有
さみだれの隙や家こしの蝸牛　同
盜人の抓む夜もありかたつふり　同
傘にたゝみこみけり蝸牛　同
四五寸に夜道明けたり蝸牛　同
たのみなき角としおもへ蝸牛　曉臺
登りつめて落たり竹の蝸牛　闌更
蝸牛落ちけり水に浮もする　白雄
山薗菜や寸に餘れるかたつふり　同
煤茅に煤けておかしかたつふり　同
柴の戸や錠のかはりの蝸牛　一茶
練塀や廻りくらする蝸牛　同
蝸牛そろ〳〵登れ富士の山　同
朝燒がよろこばしいか蝸牛　同
ぬれ足らぬ草の月夜や蝸牛　同
いで戻れ大津車にかたつふり　成美
蝸牛淵にのぞむや篠のさき　梅室
蝸牛淺茅に花の咲くを待て　乙二
月涼し角に露もつかたつふり　五明
花鳥の莚ふるへばかたつふり　樗堂
伊勢が家はきのふ賣れたり蝸牛　士朗
寢覺めたか角ありたけの蝸牛　田福
誰を戀ふて戸に身を寄せつ蝸牛　維駒
蝸牛や瀨田の長橋雨が降る　鳴雪
蝸牛や雨雲さそふ角のさき　子規
雨たれに角うたれけり蝸牛　五峰
蝸牛もたげては雲を眺めぬる　青々

蛞蝓　なめくぢ

概說

蛞蝓（なめくぢ）は蝸牛と同じく軟體動物腹足類中有肺類に屬し、**なめくぢ**、**なめくぢり**、**なめくぢら**などゝ呼び、支那の名には蜒蚰螾、附蝓、鼻涕蟲、陵螽、托胎蟲などといふのがある、元は蝸牛のやうに介殼を有したものであらうが、何時かこれを失つてしまつた、併し黑蛞蝓といふ一種には退化した小介殼を存してゐる、頭上には長短二對の觸角を有し、前にあるは短く後のは長く、長い方の觸角の先端に眼があり、口は頭の下面にある、觸角は伸縮自在で、もしこれに觸れゝば忽ち收縮する、背景には小さい粒々があり滑かであるが、腹面は平で筋肉の伸縮により徐々として運動する、陰濕の所を好み苔蘚類などを食して雌雄同體であり、背部の色は種々あつて或は灰黃褐色に黑色の線を有し或は唯褐色のものもある。

和漢三才圖會

に曰く『本綱蛞蝓、生二大山池澤及陰地沙石垣下一、宗奭曰、蛞蝓蝸牛二物也、蝸牛老者而以爲二一物一、甚謬也、蛞蝓二角身內止一段、蝸牛四角背上別有レ肉、以負レ殼行、其二物共主治功用相似而皆剋二螺螄蝸一、故生擣塗二螺螄蝸一、立所痛止。

按本草集解、蛞蝓蝸牛之辨異論多、唯以宗奭之註爲レ的、此物無殼、有二蜒蚰螺之名一、故大惑蛞蝓色灰黃色、洗淨純白、頭有二小肉角一、眼纖背有二細黑點一、無足兩脇有內裙、相連鼓行、有レ涎大抵二三寸、肌滑而濃蝸牛初生大二二分許也

又有蛞蝓夏月緣二于屋上一、變二螻蛞一者人往々見レ之然悉不然矣、深山中有二大蛞蝓一、長近レ尺者。』と誇張もあるが、やゝ眞に近い、名稱につき大槪文彥は

大言海

に左の如く說いてゐる、曰く、『なめは滑の義、くぢは緣行の意か、又滑鰌の略か』と、更に形態に就いては『蝸牛に似て殼なく、背灰黃白色にして黑斑あり、長さ二三寸、頭に二對の肉角ありて其長き方の先端に眼を具ふ、驚けば角を縮む、水濕の處に棲み、晝伏し夜出づ、多く雨後に行く、全身粘液多く乳狀の粘液を分泌し行きたる跡に雲母の如き痕を殘す』と、よく盡してゐる。更に

重修本草綱目

には記して曰く、『水濕の處に多く生ず、冬は瓦石の下に蟄す、春雨後より夜出て晝は伏す形蝸牛の身に似て長く、頭に兩角あり、驚けば角を縮入す、體に粘涎多し、梅雨の時子を生ず、二三分の長さなる者多く出て、甚だ草苗を害す、三才圖會に、一種無殼而有レ角者、其形稍大、生二於卑濕處一、積雨之後出晝二屋壁一悉成二銀迹一と云ふ、山中には長大にして三四寸なるあり、甚しくては一尺に及ぶものあり』と此の山中の巨大なものといふのは、『やまなめくぢ』のことであるといふが、多く知られてゐないやうである、面白いのは、蛞蝓を以て

象牙を僞造

するといふことである、それは鹿の角の屑を以て蛞蝓と共に煮、よく煮たものを板上に擴げ之を乾かし薄く板片とし、任意に切て用ひるので、一寸見ると象牙のやうに見えるといふ。『和漢三才圖會』の傳ふる處である。

文藝の上では

極めて貧弱で、清少納言は『枕草子』の中にいときたなきものは、なめくぢ、えせ板敷のははき、殿上の合子といひ、觀察の細かい所を見せてゐる位である。

俳句の蛞蝓

なめくぢり這うて光るや古具足　嵐雪
五月雨や鮓のおもしも蛞蝓（なめくぢ）　鬼貫
何事を壁に書てやなめくぢり　春波
身の果はいづくなるらん蛞蝓　牧人
もちの樹の幹光らせつ蛞蝓　月斗
五月雨に家振りすてゝ蛞蝓　凡兆
樂書のあひ〳〵傘の蛞蝓　竹湍
蛞蝓や何時迄晴れぬ杉の幹　露華

三すくみ

蛞蝓と蛇と蛙の三者を『三すくみ』といふ、これは蛇は蛞蝓に怖ぢ、蛞蝓は蛙に怖ぢ、蛙は蛇に怖ぢて相竦むこと、その出所は關尹子三極篇に

蠅蚘（ひる）食ㇾ蛇、蛇食ㇾ蛙、蛙食ㇾ蠅蚘、互相食也

とある、むかでを蛞蝓に代へたものと云ひ、元祿年間發行の合類節用集にも

三すくみ、蛞蝓、蜈蚣、蛇、三物相あへば皆不動、彼れ此食はれんことを畏るゝなり

と東坡集注に見ゆとある。

物類稱呼

には曰く、『蛞蝓、なめくぢり、常陸にては**はだかまいぼろ**、越後にては**山なまこ**と云ふ山中にては大さ五六寸ばかりのもの有となり貝原翁（益軒）曰く、なめくぢり、夏月屋上にはひのぼりて螻蛄（けら）に變ずる有り、然れどもとごとく然らず』とある。益軒にしてなほこんな事を書いてゐる。

草双紙の蛞蝓

蛞蝓は藝術的方面に於ては極めて貧弱であるが、ここに草双紙の『兒雷也豪傑譚』物語には蛞蝓の妖術を使ふ勇婦綱手が現はれる此の双紙は美圖垣笑顔の作で、笑顔は元來が本屋で眼に一丁字なく、唯非常に奇才があり屢々馬琴を訪うては馬琴をして勞易せしめてゐる、それは彼の長座長談義からであつた、そして彼は『三すくみ』から思ひついて、支那傳說の自雷也を繙り來り、これを日本の兒雷也として蝦蟇の妖術を使はせ、高砂勇美之助と云ふ忠臣と、綱手といふ勇婦を描出し、これに依り大蛇丸といふ兇賊に亡ぼされた更科家の再興を圖ることになる、その藤橋のだんまりは有名で、屢々上演されてゐる、大蛇丸の兇惡を懲すために、綱手に蛞蝓の妖術を使はせるといふ處にやまがある、五渡亭國貞などによつてこれが描かれてゐる。

繪畫の蛞蝓

繪畫の方では蝸牛に奪はれてゐるのであまり見ない、故福澤捨次郎氏の所藏に文晁の半折があつたが、それも壁に印された這ひあとの方に興が繫がれてゐた、曾て山村耕花氏が『三すくみ』の題で蛇と蛞蝓と蛙を描き或る展觀に陳列したが一向に賣れない、編者が三すくみがいけない題をかへやうと『三雄爭覇』とつけたら早速賣れてしまつた、蛞蝓の繪にはこんな思ひ出がある。

藝術資料　第四期　魚介蟲類篇　第九冊　要目

◇蝶・蛾◇

口繪　本文

汪承霈筆　百蝶圖（原色版）　蝶蛾類概說
圓山應擧筆　寫生帖中の鳳蝶（玻璃版）　蝶の文獻
趙　昌　筆　篠蟲圖　蝶の種類　高山の蝶
同　草蟲圖部分　源氏物語「胡蝶」
酒井抱一筆　花鳥畫卷中の蝶　姫めづる姫君（堤中納言物語）
狩野探幽筆　芙蓉蝶圖　謠曲「胡蝶」
狩野常信筆　牡丹蝶圖　蝶と詩藻
谷　文晁筆　百蝶巨龜圖　蝶（正岡子規）
長澤蘆雪筆　蓼蓮香圖　蝶の詩（北村透谷）
應擧寫生帖の蝶（其二）　繪の蝶
土田麥僊寫生帖中の蝶三圖　蝶の和歌、漢詩、俳句
森　春溪筆　肘下撰蠕の蝶　蛾雜纂
遠水御舟筆　炎舞　蛾の文學
川端龍子筆　白日夢
森野東園蟲類圖譜の蛾
松平家藏蝶蒔繪の手箱
蝶鳥模様古鏡
神宮寺及西大寺繪箱の蝶（扉）

後記

◇今回會員諸彦の御手許へ御屆けしました資料第八冊は、蛙、蝸牛、蛞蝓を收めました。はじめは兩棲類のみを收める豫定でありましたが、材料の都合上、このやうなものになりました。◇蝸牛や蛞蝓は、動物學上から申せば腹足類、貝類に入るべきものであります。一般的には蝸牛や蛞蝓を貝類に入れることも如何と思ひ季節の關係を考慮しましたが蛙の二者を加へました。◇第九冊は別項に記しました。蝶は何といつても通俗的の蟲蛾類で花形です。材料も中々豐富ですし、いろ〳〵の方面から集めました。こゝに博く諸彦の一粲を博し得ることは必ずと思ひます。◇堤中納言物語の「蟲めづる姫君」も全文を入れました。これは一寸無關係のやうですが姫が一番主要のものとしてゐるものは蝶の幼蟲ですから、矢張蝶の部に入るべきものでしたかと思ひます。◇あれか、これかと口繪の撰定にも相應に骨が折れましたが兎角も出來る限りは努力はいたしたつもりであります。◇これで第十冊は蟬、螢、蟷螂、何れも面白いものです。十一冊は同じく蟲の最終として靖蛉、蜂、松蟲、鈴蟲號と、これに年中行事の「蟲えらみ」を加へます。御愛讀下さい。（編者）

藝術資料　第四期　第八冊
（毎月一回二十日發行）

會員外及分賣　定價　金壹圓五拾錢　郵稅金九錢

會費
三ヶ月　金參圓六十錢
六ヶ月　金七　圓
一ヶ年　金拾四圓
郵稅共

會員規定
昭和十五年十一月一日印刷
昭和十五年十一月十日發行

東京市世田ヶ谷區下馬二ノ二四八
編輯者　金井紫雲
京都市中京區寺町二條南入
發行者　山田直三郎
京都市下京區北小路新町西入
印刷者　須磨勘兵衞
京都市下京區西洞院七條南入
印刷所　內外出版印刷株式會社

發行所　合名會社　芸艸堂
京都市中京區寺町二條南（電話上二一九〇番／振替京都一四〇八番）
東京市本郷區湯島一ノ一（電話下谷三六〇〇番／振替東京四三四七番）

出版界

現代名家素描集

福田平八郎畫伯篇

現代名家自選素描集の第五輯は福田平八郎畫伯篇である。同畫伯が如何なる內容のものを自選せらるゝか興味を以て迎へられてゐたが、果然雪の梅と鴨といふ二題のもとにその造詣蘊蓄を傾注せられたもので、單瓣の紅梅白梅は加茂に於ける寫生、八重の紅梅白梅は伊豆長岡の旅舍にて親しく筆を執られたもの、これに畫伯が鄕里大分にて寫生された眞鴨十數圖も選み、例によつて中五枚は着色とし、一は細緻精巧なる木版刷として出來得る限り原畫の氣分を出さんと試みたもの、その枝に雪の降り積つた形、花の雪に蔽はれた姿、更に鴨のさま〴〵なる形態と色彩は畫伯の靈腕によつて遺憾無く描き出されてゐる。これこそ將に畫壇待望のものとして、江湖の喝采を博することであらう。曩に世に出た田中咄哉州畫伯篇と相俟つて、美術出版界に一のエポックを劃するものといつてよい。（菊四倍大和裝美本 一輯定價七圓、芸艸堂發行）

文樣萬華鏡

下村秀治郎著畫

著者は我が圖案界の麒麟兒として夙にその創作的頭腦豐富なる才藻とを謳はれ、一作を出す毎に東西染織界に多大のセンセーションも捲起し之が作品は學界爭ふて手にする處となる、今感ずる處あり今時の新國家體制に順應した指導的文樣圖案を創作し之を世に問ひ、以て彩管報國の所志を貫かんと、その第一をわが國華たる菊花に擇び、滾々として盡きざる創作的意圖を披瀝し上梓されたのが此の文樣萬華鏡である。大菊あり中菊あり、小菊あり野菊あり、これを千變萬化の妙技によつて圖案化したもの百數十種の多きに達してゐる。眞にこの驚心駭目の業、新時代に順應する好個の文樣圖案集として洽く世に推薦する。（菊二倍大木版三葉一色版數十葉和裝美本、定價五圓五十錢）

ひながた繪合せ

河原崎星洞著

著者がこれまで續刊し來つた花詩歌の一で本册は紀元二千六百年を記念すべく上古より現代に至るまでの武具祭器調査其他各時代々々の代表的のものを撰み、これを巧みに圖案にしたもの、先づ上代の鎧、刀劍、祭器土器、埴輪、古鏡より初めて奈良朝、平安朝に及び唐船、短檠、蹴鞠、檜扇、貝涌、雅樂舞樂の調度樂器次て源平時代の武器、戰國時代を經て德川時代に至り風俗各種、茶湯、行旅更に近代の黑船、鬪雞、行燈、纒など凡ゆる方面に亘り、これを撰み出し、精緻なる木版刷數十度の豪華を盡しるもの、亦好個の風俗圖案集を見ることが出來る（和裝折本仕立金拾圓）

聚古文樣

河原崎星洞著

文樣圖案に於ける溫古知新に著者の驚くべき精神と努力は、古來あらゆる文樣圖案を檢討し、古代名物裂等の周到なる研究を敢えてし、然も現在に於ける好尙傾向を考察し、その上に立脚して筆を執つて模樣總て八十五圖を收めてゐる。植物に動物に、天象に氣形に、一度び毫を揮へば忽ちこれを文樣化し圖案化す、亦驚くべき才藻といはねばならぬ。中にも二葉葵、雪の文樣くさ〴〵、鱗形齒朶獵文樣、川千鳥、笹龍膽、龍の各種蓮華文、花兎、鳳凰丸、櫻立涌などには、古代模樣を更に自家の工夫で更生してゐるのが認められる。圖案界の新體制に棹す一つの試みといつてよからう（和裝木版數十通刷美本 定價拾圓）

硯山畫集

水田硯山著

京都南畫界の巨星水田硯山畫伯が近作廿點を以て東京に進出個展を開き好評を博したその作品集である。收むるの處

雲山樵唱　秋澗、池糖春陰　雪麓
秋林殘照　山霧、紅樹小禽　牡丹
綠陰溪端　翠溪、東海晨曦　雪霽
青崖飛瀑　麗春、竹韻夏聲　春郊
山村秋晚　夏溪、黃蜀葵　遲日

で、「雲山樵唱」は精圖も極めて雄大である、壁立する山容に新意あり、秋林殘照亦畫伯得意のもの、山霧は神韻緲々たるものあり、「東海晨曦」また力作、殊に面白いのは、花鳥畫でこれは今まであまり公にしなかつたが、黃蜀葵にせよ、牡丹にせよ玉蘭を描いた麗春にせよ、よく一家の風を具へてゐる。（四六二倍和裝三圓）

趣味俳句模樣

上野淸江著

古人の名句から五十句を選び、その句意を取りて圖案としたもの、たとへば「左右の手取られ十三詣哉」といふ洛山人の句に七五三を利かせ花丸の春美しい處描かき、「松のひまほのぼの見ゆ花の春」といふ曉臺の句に松と櫻を巧みに織り込みたる「片袖やたらぬ錦の松の蔦」といふ也有の句に誰が袖を利かした如きものである亦面白い試みである（和裝美本三圓五十錢）

岡本東洋撮著

東洋花鳥寫眞集

金井紫雲氏解說

全部未發表の新作、瞬間の動作を捉へ細部の描寫明確

◇鳥之卷　◇愈々續刊

第壹輯　鷹（蒼鷹）　既刊
第貳輯　橿鳥（かけす）　〃
第參輯　連雀と深山頰白　〃
第四輯　鷗　〃
第五輯　大鷲　〃
第六輯　眞雁　〃
第七輯　眞那鶴　〃
第八輯　丹頂　〃
第九輯　眞鴨・鶩（あひる）　〃
第十輯　鶯・目白・頰白　〃
鶫（つぐみ）
第十一輯　木葉木兎・桑鳫（いかる）　〃
胸黑千鳥・青啄木鳥
第十二輯　隼と蒼鷹　〃
第十三輯　烏骨雞と軍雞　〃
第十四輯　かいつぶり・翡翠・鷂　〃
第十五輯　鴉と鳶　〃
第十六輯　矮雞と珠雞　十一月發行
第十七輯　鵯・山雀・日雀　十二月發行

◇動之卷◇靜之卷◇各二十五輯完結（內容見本進呈參錢 切手封入御申込乞）

——以下續刊——

◇精巧コロタイプ印刷◇四切判臺紙附◇各輯二十葉袋入◇

繼續會員特價　金四圓（分賣金五圓）送料貳拾貳錢

發行所　合名會社　芸艸堂

東京市本鄕區湯島一　電話下谷三六〇〇番　振替東京四〇九〇番

南條二町寺市都京　電話上二九〇番　振替京都一四〇八番

素描鑑賞の機運來る！

繪畫の研究は先づ素描から！

現代名家 自選素描集

第一輯 山口蓬春畫 植物篇　第二輯 森白甫畫 鳥類篇　第三輯 堅山南風畫 魚篇 類篇　第四輯 田中咄哉州畫 山水動物篇　第五輯 福田平八郎畫 雪の梅と鴨篇

續々刊行の素描集

伊東 深水畫伯 人物篇
中村 岳陵畫伯 花鳥篇
近藤浩一路畫伯 山水篇
山川 秀峰畫伯 舞踊篇
西澤 笛畝畫伯 花鳥篇
榊原 紫峰畫伯 花鳥篇
福田平八郎畫伯 花鳥篇
山口 華楊畫伯 花鳥動物篇
小野 竹喬畫伯 山水篇
中村大三郎畫伯 人物篇
金島 桂華畫伯 花鳥篇
福田 翠光畫伯 鷹篇
池田 遙邨畫伯 山水篇
上村 松篁畫伯 花鳥篇
德岡 神泉畫伯 花鳥篇
石崎 光瑤畫伯 花鳥篇

別輯

鏑木 清方畫伯篇
結城 素明畫伯篇
西山 翠嶂畫伯篇
前田 青邨畫伯篇

既刊

山口 蓬春畫伯篇
森 白甫畫伯篇
堅山 南風畫伯篇
田中 咄哉州畫伯篇
福田平八郎畫伯篇

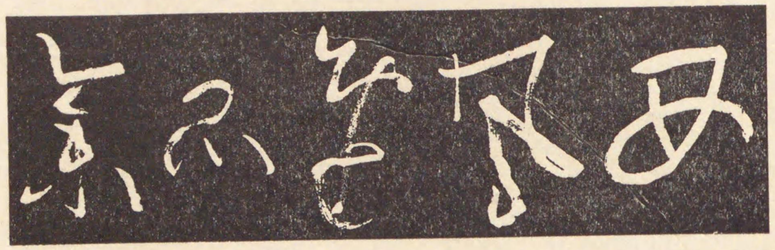
近刊

兒玉 希望畫伯篇

菊四倍大 各一輯
木版玻璃版 十五葉
和裝清楚綴
定價 各輯 金七圓
送料三十三錢

發行所 合名會社 芸艸堂
東京市本鄉區湯島一 電話下谷三六三〇番 振替東京四〇九四〇番
京都市寺町二條南 電話上二九〇番 振替京都一四〇八番

竹内栖鳳先生自選畫集第二期



第二期發行に就いて

竹内栖鳳畫伯は、現代畫壇に於ける最高峰で、その作は輓近一段の妙境に達し一作また一作、悉く鑑賞界の絶讃を博して居ります。弊堂曩に畫伯に請ひ、その自選作品集を刊行するや好評嘖々、潮の如き歡迎裡に第一期十輯を完成しましたので、更に第二期十輯の刊行を計畫し畫伯に請ふ處ありましたが、畫伯は欣然快諾せられ、茲にこれを發表するの光榮を擔ひました。

今回の第二期に於ては畫伯の希望に基き特に全部を我が國獨特の木版印刷とし、畫面も悉く原寸として彫刻印刷共に斯道の精粹を蒐めて之に當らせることになりました。必ずや第一期以上の大歡迎大好評を博することゝ信じます。ここに謹告して洽く江湖の一粲を請ふ次第であります。

發行者識

第一輯　第二輯　第三輯

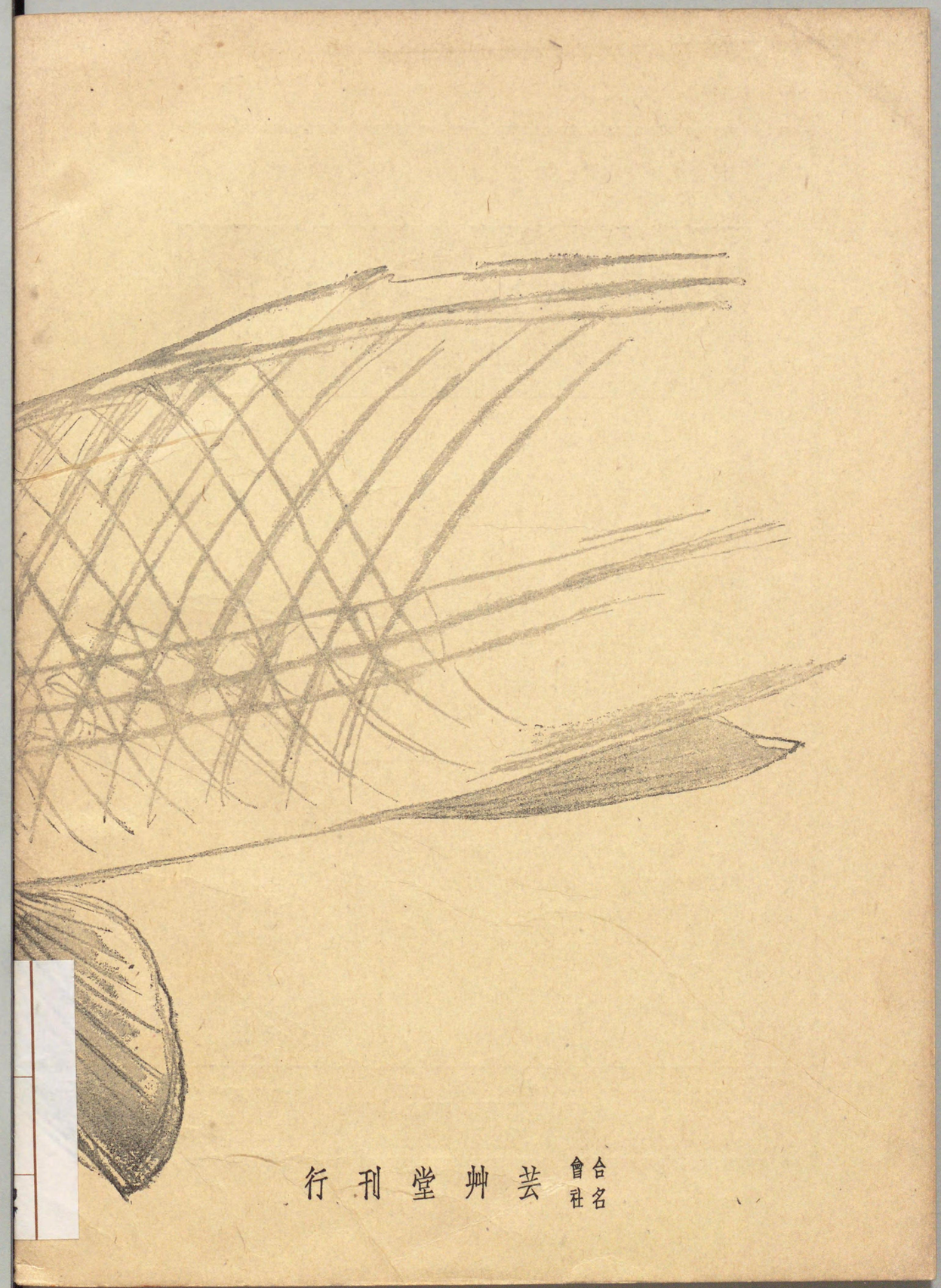
春郊　山村の花　江南風色
溪村晩霽　冬日村居　旅窗漫筆
しろ柿　釜はり山　殘夢
起上り

第四輯　以下續刊

體容略規

◇印刷　大和版
◇用紙　製版印刷に適せる生漉奉書極上紙を使用
局紙耳附貼穗薄雲母刷
◇寸法　縦一尺六寸横一尺三寸
◇刊行　毎輯三葉宛發行
全十輯三十葉にて第二期完了
第三期續刊
◇定價　金百五拾圓（分賣せず）
繼續會員に限り
全十輯特價金百貳拾圓
（十回拂ひとす）
各輯送料四拾五錢

發行所 合名會社 芸艸堂
東京市本鄉區湯島一 電話下谷三六三〇番 振替東京四〇九四〇番
京都市寺町二條南 電話上二九〇番 振替京都一四〇八番



芸艸堂刊行
合名會社